酔いどれ妻と
危険な好奇心

熱い湯に浸かりながら、
火照った頬を冷たい夜風に撫でられるのは格別だった。
体の芯まで熱くさせるのは温泉だけが原因ではないだろう。
ちらりと周囲に視線を流す。

露天風呂には我々夫婦以外に男が三人いた。
三人ともニヤニヤと口元を歪めながら
僕の妻の胸を、腹を、太ももを、食い入るように見ている。
妻の育代は蛇に睨まれた蛙のように身動きが取れないでいた。
僕も緊張している事を妻や男たちに悟られないよう、
気を付けて話し掛ける。

「固まってないでもっとくつろぎなよ」
「無理でしょ……　もう、だから言ったのに……」

脱衣所に男物の衣類しかなかった時点で妻は混浴に否定的だった。
普段の自分であれば妻の意見を優先していただろう。
しかし、今回の旅行を企画した段階でこのような事態は想定していた。
いや……
正確には「期待していた」が正しい。

子供が産まれてから僕は良き父親になれるよう心掛けて自分を律していた。
それは育代も同じだと思う。
僕たち夫婦は良い親を演じるため、必要以上に性行為から遠ざかってしまっていた。

その反動だろうか。
子供が中学生になり、手が掛からなくなると奇妙な好奇心が芽生えた。
最愛の妻が他の男に汚されるのを見てみたい――
異常な願望である事は理解している。
しかし、欲望は日増しに強くなる一方で、
このままでは頭がどうにかなりそうだった。
だから夫婦水入らずで旅行に行く話が出た時は、
露天風呂で妻の裸を大衆の眼前に晒(さら)してやろうと心が浮き立った。

そう言う訳で、嫌がる妻を何とか説得して混浴に入ったものの、
このままでは面白くない。
タオル一枚の半裸の妻を見ず知らずの男たちに見せているだけでも
激しい興奮が心臓を圧迫するが、育代は胸を隠して身じろぎもしないので
肌がほとんど露出されない。
これでは水着姿と変わらないではないか。
せめて乳首を出させたい。

「せっかくの温泉なんだからもっとリラックスしなよ。胸も隠す必要はないよ」
「でも……　他の男性も見てるでしょ？」
「いいから」
「……博司さんがそう言うなら」
育代は戸惑いながらもゆっくりと胸を隠していた手を下ろした。

妻の乳房が露わになる。
大きく、柔らかそうな乳房に艶のある張った乳首が男たちに向けられた。
おぉ、と囁くような低い歓声が聞こえた。
「やっぱり恥ずかしい……」
「気にしないの。ゆっくり浸かった方が気持ち良いだろ？」
「それはそうだけど……」
男たちの絡み付く視線が妻の乳首に集まっているのが分かる。
育代は恥ずかしそうに身をよじった。
男たちの興奮と妻の恥じらいが下腹部をたぎらせる。
本来、夫である僕以外の男が妻の裸を見てはならないのだ。
その妻の裸を三人の男がまじまじと凝視している。

苛立ちを伴った優越感が胸に迫った。
見て欲しくない一方で、この女は僕の妻だぞと誇示したい気持ちもある。
男の一人がこちらへと近付いて来た。
不安と期待を胸に男の挙動を窺う。

「奥さんのおっぱい綺麗ですね」
「ははは。自慢の妻ですよ」

男は僕を一瞥すると再び視線を育代へ戻した。
さっきよりも近い分よく見える事だろう。
僕の妻の裸体を舐めるように見つめている。

「あ、あまり見ないでください」
蚊の鳴くような声を出すと育代は胸を隠した。
妻の可愛らしい仕草によって愛おしさと嗜虐心が沸き上がる。
「いいじゃないか。それだけ育代が魅力的って事なんだよ。
ほら、もっと見せてあげなよ」

信じられない、と言いたげな表情で育代が僕を見つめる。
僕が笑って頷くと、妻は困惑した顔で腕を下ろした。

再び露わになった乳房を前に男は嬉しそうに話し掛けてきた。
「スタイル良いなぁ。美人さんだし惚れ惚れするねぇ。ひょっとして女優さんか何か？」
「……い、いえ、そんなんじゃありません。ただの主婦です」
「そうなの？　それじゃ旦那さんは奥さんを独り占めだ。羨ましいねぇ」

育代は恥かしそうにしているばかりで何を考えているか窺い知れないが、
少なくとも僕は妻を褒められて優越感に浸った。
男は湯の上からでもハッキリ分かるくらい勃起している。
目の前で育代の抱き心地を想像しているに違いない。
この男は妄想する事しか出来ないが、僕は実際に育代を抱く事が出来るんだ。
今、この場でセックスしたらさぞ痛快だろう。

「見れば見るほど良い体してるなぁ、奥さん。
息する度におっぱいがプルプル動いちゃって。柔らかそうだなぁ」
「……博司さん、もう出ましょう？」
「まぁまぁ。まだ入ったばかりじゃないか。
それに、この人の言う事も分かる気がするしね」
そう言うと僕は育代の乳房へと手を伸ばした。

「やだ……！　やめて……！」
「随分ご無沙汰だったしさ」
「何もこんな所で……
他の男性もいるのに……！」
「いいじゃないか。
皆さんも喜んでいるみたいだし」
男たちの方を見ると
三人ともニヤニヤ笑っていた。
「俺らは構わないよ」
「いいぞ、旦那さん！　セックスしても良いぞ！」
「今は他の人もいないから……」
僕に賛同する声が上がり、育代は顔をしかめた。

「部屋に帰ってからでいいじゃない……！」
「みゆきが産まれてからずっと我慢していたんだよ……
少しくらいハメを外したっていいだろ……？」
「だからって……」
「自慢の育代を見せびらかしたいんだ」
「……もう」

育代は観念したのか
僕の腕の中で大人しくなった。
抵抗しなくなった妻の乳房を
思う存分揉みしだく。
両腕で育代の体温を感じながら
手の平で乳房の柔らかさを堪能する。
久しぶりに妻の感触を味わう興奮もさる事ながら、
他人の前で裸の妻の乳房を揉むという
異常な状況が感情を昂ぶらせた。
男は三人とも勃起していた。
育代の豊満な体に欲情しているのは明らかだ。
妻の乳房を触ってみないかと尋ねれば一も二もなく食い付くだろう。

無骨な手が育代の乳房を鷲掴(わしづか)む……
小皺(こじわ)を刻んで骨張った顔が
育代の可愛らしい顔に近づいて唇を奪う……
勿論育代は抵抗するが
男三人の力に敵う訳がない……
無理矢理股を開かれ、
あの勃起したペニスが育代の中に
突き立てられるのだ……
この男たちに蹂躙(じゅうりん)される妻を想像して胸が苦しくなった。
同時に酷く興奮してペニスがビクビクと脈打っている。

妻が犯される光景を見てみたい気はするが
現実的にはありえなかった。
今後の家庭生活を考えると
嫌がる妻をただ眺めている訳にはいかない。
そもそも他人に胸を触らせるだけでも
育代は拒否するに違いない。
育代がその気になればどうだろうか？
貞淑な妻である育代が他の男に体を許すとは考えられないが、
一縷の望みを託して乳首に狙いを定めた。

「あっ」
育代から可愛い声が漏れた。
笑いながら三人で
ボソボソ喋っていた男たちが静まり返る。
「可愛いよ。育代」
「あっ、あっ……」
親指と人差し指で乳首を摘まんで擦り合せる。
程良い弾力のあった乳首が次第に硬くなっていった。

「あっ、あっ。うぅん……」
育代が切なそうに声を上げる。
コリコリになった乳首を何度も擦り合せた。
「はぁ……はぁ……」
艶のある息遣いに思わず怒張したペニスを育代の太ももに擦り付けた。
抵抗する様子はない。
ひょっとしたらセックスも出来るかもしれない。
素性も知らない男たちの前で妻とセックスするのは魅惑的な考えだった。
乳首を愛撫する動きにも一層熱が入る。

「いいねぇ、奥さん。 超色っぽい」
男の下卑(げび)た笑い声に育代はハッとなって身を強張らせた。

「も、もうおしまい！　私、体洗ってくるね！」
小さな声で「続きは部屋で……」と恥ずかしそうに言って
育代は僕の腕の中から抜け出て洗い場へ向かってしまった。

僕は肩を落として妻の後姿を眺めた。
とても中学生の子供がいる
母親のプロポーションには見えない。
くびれた腰から広がる安産型の大きいお尻は
何度も見ても欲情をそそられる。
妻の姿に見惚れていると
背後から男に話し掛けられた。

「奥さん、本当に良い体してますね」
「あ……　え、えぇ。ありがとうございます」
「旦那さんも変わっていますね。
普通、自分の嫁さんの裸を見られるのは嫌がりますよ」
「ははは。そうですね……　普通はそうですよね」
「ひょっとして見られる方が燃えるタイプだとか？」
返答するのに一瞬ためらった。
親しくもない相手に自分の欲望を打ち明ける事に抵抗がある。
しかし知人でもない男だからこそ、
ひた隠しにしている性癖を暴露する機会だと思った。

「実は……　そうなんですよ。子供が産まれてからずっと
セックスレスに近い状態だったんですが、最近妙に……
妙な好奇心と言いましょうか。
……妻の裸を、他の男に見せたくなりまして」
流石に妻と他の男がセックスしている所を見たいなどと言うのは憚られる。
頭の中で整理しながらポツポツ話すと男はうんうん頷きながら聞いてくれた。

「分かるな～。奥さん、スタイル良いし美人ですもんね。
露出趣味がある人は結構聞きますよ。
中には自分の彼女や奥さんを他の男に抱かせるなんて趣味の男も……」

心臓が飛び上がる思いをした。
心の中を見透かされたような気がしたのだ。
そんなはずはないと改めて自分と同じ、
奇異な性的趣向を持つ人間がいる事に驚愕した。

「あれ？　ひょっとして旦那さん、そう言う事も興味あったりします？」
「……」

何と答えたら良いか、とっさには判断がつきかねた。
掠れた声で辛うじて言葉を吐き出す。

「え、ええ……　まあ……」
消え入りそうな僕の声を飲み込むように男は息を巻いた。

「だったら俺らで試してみませんか？
若い男だと奥さんに夢中になられたり、
奥さんが若い男に取られたりとかあるけど、
俺らはいい歳したオッサンだから綺麗に遊べますよ」
「遊ぶ……？」
「えぇ！　セックスも娯楽ですからね。
あなた達夫婦が納得して
奥さんと俺らがセックスするのはただの遊びですよ。
お互いに本気じゃないし後腐れもない」
「セックスをそう言う風に今まで考えた事がありませんでした……
妻だってそうだと思います」
「真面目だなぁ。
俺らの前で奥さんのおっぱいこねくり回してた癖に」
「あっ、あれは……　その、すいませんでした……！」
「いやいや、こっちも楽しんでたよ。で、どうですか？」
「い、いえ……　妻は絶対に嫌がると思います」

「嫌がらなかったら？」
「えっ？」
「もしも奥さんが嫌がらなかったら
旦那さん的にはオッケーなんですか？」
「それは……」
家でも外でも育代はいつも僕の事を立ててくれた。
結婚する時なんて僕が嫌な思いをしないようにと
男友達のアドレスを削除する程の思慮深い妻だ。
そんな育代が他の男に抱かれる事を受け入れるなど到底思えない。
思えないが……
意を決して言った。

「妻が嫌がらなかったら……　僕は大丈夫です」
「決まりですね！
後でお邪魔するって事で良いですか？
部屋はどちらに？」
「部屋はもみじです……
あっ、部屋に来るのは良いんですが……
その、あまり変な事は……」
「勿論！　奥さんが嫌がるような事はしませんよ。
駄目って言われたら大人しく引き下がります。
こっちは男三人でむさ苦しい旅行でしたからね。
美人な奥さんと酒を交わせるだけでも十分ですよ」

男の言葉を聞いて安心した。
僕の欲望は現在の生活を破壊する恐れがある事を自覚している。
家庭を失う代償まで払って見たい物ではない。
ましてや自分の欲を満たすために育代を傷付けるなどもっての外だ。

だが、もしも、育代が嫌がらなかったら……？
可能性は低いと理解しているものの、
わずかでも育代が僕以外の男とセックスする可能性がある事に
期待と不安を抱かずにはいられなかった。

「博司さんと二人でゆっくりしたかったな……」

育代は不満そうにポツリと小さい声で呟いた。

あれから温泉を上がって部屋に戻るとすぐに彼らは酒とつまみを持ってやって来た。

決して広くない部屋で自分の裸を見た男たちと

顔を突き合わせるのは育代としては肩身が狭いだろう。

「それじゃ、軽く自己紹介から。
相沢大輔です。東京にある第二三共という製薬会社に勤めています。
ちなみにこいつらは俺の同期で独身仲間です」
「お前はバツイチだろ」
「そうだ、そうだ。子供もいる癖に何が独身仲間だ。仲間じゃねーよ」
「おいおい、酷いな」
他二人の野次に相沢が苦笑する。
困った笑顔も爽やかな男だった。
温泉で僕の願望を聞いてくれたのも彼だし、話しやすそうな印象を受けた。

続いて自己紹介したのは温泉で度々育代にちょっかいをだしてきた茶髪の軽薄そうな男だった。

「同じく第二三共の笠原一隆です。趣味は風俗巡り」

「もう酔ってんのかよ」

「酔ってないよ。本当なんだからしょうがないだろ」

「すいません、奥さん。こいつ会社や水商売以外の女性と話すの久しぶりなもんで」

「い、いえ……」

育代の頬が引き攣る。

かく言う僕も何と答えて良いか分からず愛想笑いを浮かべるのが精一杯だった。

「三好良成です。趣味は漫画とゲーム」
「嫁さんは二次元にいます」
「うるせぇ！」
小太りで眼鏡という見た目通りのオタクらしい。
軽口を叩き合う彼らを尻目に僕は荷物から三人分の名刺を取り出して自己紹介した。
すかさず相沢は自分の名刺を差し出してきた。
「あっ、俺、名刺入れ部屋だわ」
「俺も」
「簡単な挨拶ですから気にしないでください。それでこちらは妻の育代です」
視線を送ると育代は三人に向かって頭を下げた。
「博司の妻の育代です」
簡潔な自己紹介を終えると育代は口を閉じた。
あまり愛想が良いとは言えない挨拶だったが
男三人は笑顔を浮かべている。

「お子さんがいるんでしたっけ」
「はい。中学生の娘が一人」
「えっ！　とても中学生のお子さんがいるようには見えないなぁ。二十代半ばにしか見えない」
「そうそう！　高校生でも通じるんじゃないですか」
「それは言い過ぎだと思います……」
若いと褒められて満更でもなさそうに育代が微笑んだ。
グラスの中の酒が揺らぐ。

「それじゃ、乾杯といきましょうか」
相沢の音頭で口々に乾杯を言って酒を口に運ぶ。
アルコールが熱と共に喉を走り、強い匂いが鼻孔を刺激した。

笠原がへらへら笑いながら育代に話し掛ける。
どこから来たとか、好きなテレビ番組とか、当たり障りのない話題で安心した。
温泉でも露骨に色目を使ってきた男だ。
夫公認で人妻を抱けると目が眩んで順序を踏まずに
相沢から聞いているであろう僕の性的趣向を喋られたら堪ったものじゃない。
笠原と育代の会話に相槌を打っている相沢に話を振った。

「会社の同期で旅行なんて仲が良いんですね」
「いやぁ、腐れ縁ですよ。
異動が多い会社だもんで長い付き合いのある奴は限られるんです。
独身だと肩身が狭いし」
「そう言えば相沢さんもお子さんがいらっしゃるとか。
……あっ、聞くのはマズかったですか？」
口にしてから失言に気付いてハッとした。
離婚しているなら家庭の事情も複雑になっているだろう。
今日会ったばかりの人間に詳しく聞く内容じゃない。

「いえいえ、気にしないでください。
小学五年生の息子がひとり。随分会ってないなぁ」
「それは……　寂しいですよね」
「そりゃ、もう」
相沢は育代の方をチラッと見て、僕に向き直ると小声で言った。

「ウチが離婚したのは性の不一致のせいなんですよ。
だから博司君を応援したいんです」
「応援って……」
「見てみたいんでしょう？　あの美人な奥さんが寝取られるのを」
ドキリと胸が高鳴った。
育代が聞いてないか心配して目を配る。
しつこく話し掛けてくる笠原の対応に苦労しているらしかった。
「奥さんに言い出しにくいのも分かります。
拒絶する女性がほとんどでしょうしね。
でも、無理だから諦めよう、じゃあ夫婦の関係にヒビが入りますよ。
ウチがそうだったから」
相沢夫婦に何があったのか興味があったが
聞いて良い事なのか分からなかったので結局聞かない事にした。
一般的な性生活から離れた願望を持つ人だっている。
この僕のように。

「俺らとしてもあんな可愛い奥さんを抱いてみたいし、ウィンウィンな関係ですよね」

相沢はニコッと爽やかに笑う。

こちらとしては爽やかに妻を抱きたいと言われても困るのだが。

僕は頬を引き攣らせてコクリと頷いた。

「あっ、もう大丈夫ですから」
「奥さん、全然飲んでないじゃない。折角の旅行なんだからパーッと飲んじゃいなよ」
「いえ、本当に結構です。お酒はあまり好きではないので……」
「まぁまぁ、そう言わずに」
育代と笠原が押し問答をしているみたいだったので助け舟を出す事にした。
「まだ一杯しか飲んでないじゃないか。ほら、飲みなよ」
育代の空いたグラスに無理矢理酒を注ぐ。

「私、そんなにお酒に強くないし……
他の人もいるんだから」
育代はグラスを持ったまま口を付けようとしない。
今夜の結果はどう転ぶか分からないけれど
育代が素面のままでは恐らく勝負にもならないだろう。
駄目なら駄目でしょうがないが、
失敗が確定している状況は避けたい。

「はぁ……　そうかぁ……
家だとみゆきがいる手前、酔っ払えないから
今日は思う存分育代と飲みたかったんだけど……」
息を深く吐いてわざとらしく肩を落とし、背中を丸める。
泣き落としである。
「わ、わかりました。でも寝ちゃったら起こしてね？」
育代は僕の期待に応えようと
グラスを傾けてコクコク喉を鳴らした。
半分ほど飲んで息をついた育代は頬が少し赤らんでいた。

僕たちのやり取りを見ていた三好がおずおずと言う。
「娘さん中学生なんですよね。 写真ってあります？」
「あぁ、ありますよ」
三好にスマホの待ち受け画面を見せた。

育代とみゆき、愛する妻と娘が花が咲いたような笑顔で写真に納まっている。
渾身の一枚だった。
「うわぁ！　可愛いなぁ！　こんな娘がいたら良いなぁ！」
「あぁ、本当だ。可愛いお子さんですね」
「奥さんに似て娘さんも美人だなぁ」
相沢と笠原も写真を見て口々に娘を褒めてくれた。
人間、中身が大事とは言え子供の容姿を褒めてくれるのは素直に嬉しい。

「他にもあります？」
良い気分になった僕は催促する三好にみゆきの画像フォルダを見せた。
三好は感嘆の声を上げて次々とページを開いていく。
「記念にいくつか送って貰えませんか？」
そんなに良い写真があったのかとスマホに目を落とす。

画面にはみゆきの水着姿が写っていた。
心のシャッターが音を立てて僕と三好の間に落ちた。
育代の表情も凍り付いている。
「いえ、こういう物は家族だけで楽しむ物なので」
「一枚だけでも……」
「駄目です」
ハッキリと丁重に断ってスマホを返してもらった。

大分減っている育代のグラスに酒を注いだ。
育代も僕のグラスに酒を注ぐ。
二人で笑顔を交わしながら一緒に飲んだ。
育代よりも先に僕が潰れてしまわないように気を付けなければなるまい。
さっきまで熱心に育代に話し掛けていた笠原もグビグビ酒を飲んでいる。
育代のつれない素振りに匙を投げたのだろう。

「素人さんはやっぱ難しいわ。
プロは何パターンか傾向あるから楽なんだけどよぉ。
向こうだって無下にはしてこねぇし。
人妻だしなぁ。
人妻デリヘルなら逆に尻が軽いんだがなぁ」
笠原が相沢相手に管を巻いている。
何を言っているのか理解に苦しむ。

「旦那さんは風俗行く？」
「い、いえ。行った事はありません」
「そうだよなぁ。そんな美人の奥さんがいりゃ必要ねぇよなぁ。
でも嬢のテクニックはすっごいんだぞ？」
育代の視線が痛い。
妻から発せられる不快感が伝わってくる。
そんな様子を相沢も察したのか話題を変えてくれた。

「ウチの子、来年は中学受験だから頭が痛いよ。
公立は学級崩壊してる所が多いって聞くけどどうなんです？」
育児の話に育代は食い付いた。
「私立の方が真面目とは聞きますね。
でも色々ありますから、やっぱり受験前に見学に行った方が良いですよ」
共通の話題があるのは大きい。
よく喋るようになった育代とは対照的に
笠原はつまらなそうに不貞腐れていた。

飲み始めて小一時間が経過した。
もうどれくらい飲ませただろう。
育代はすっかり出来上がっている様子だった。
相沢達にお酌するよう言って
何度も立たせている内に浴衣が乱れてしまっている。
それすら気付かない程に育代は酩酊(めいてい)しているのだ。
男たちは妻の浴衣からはだけた肌を肴(さかな)に酒をチビチビ飲む。
そんな彼らに見られている
育代を見ながら飲む酒は美味しかった。

見え隠れする裸は全裸よりもそそる物がある。
ましてやここは風呂などではなく、親しくもない男と宴会している場なのだ。
そんな場所でチラチラと乳首まで見せる育代に欲情が掻き立てられた。

笠原の風俗の失敗談や武勇伝など
下品な話でもクスクス笑うようになっていた。
好奇の目で自分がマジマジと見られているとも知らずに
育代は白い肌を晒す。
話は自然と猥談の方向へ向かって行った。

「実際、セックスレスってのは重大な問題なんですよ。
どんなに愛し合っている夫婦でもセックスしなくなった所為で
パートナー以外の異性と関係を持つなんてよくある話です」
「経験者が言うと重みが違うねー」
てっきり育代は聞き役に徹するかと思いきや、突然勢い良く口を挟んだ。

「私たちはそんな事ありません！
そりゃぁ、夜の回数は少ないですけど……
夫婦ってのは体の関係だけじゃないですか！
心と心が深く繋がり合う……
言うなれば心のセックスですよ！
私たちは毎日、心でセックスしてるんです！」
言葉を捲くし立てると育代はグイッと酒を呷った。
様子がおかしい。
こんな育代は初めて見た。

「心のセックスも大事だけど、体のセックスも大事だよ～。
気持ち良くなると心も満たされない？」
「そうかもしれませんけど……
博司さん全然誘ってくれないし……
してもすぐ終わっちゃうし……」
雲行きが怪しくなってきた。
育代は僕に不満を持っていたのだろうか。
それにしてもすぐ終わっちゃうって……
「ハハハ。博司君、早漏なのか。
でも育代さんみたいな美人相手だと
早くなっちゃうのも分かる気はするな」
「俺はどんな美人でも一時間は出来るぜ。
デリヘル呼んで五時間ぶっ通しでヤッた事もある」
笠原が自慢気に言う。
五時間というのは流石に嘘だろう。
五分も持たない僕からすれば一時間というのも信じられない。
育代も同じ事を考えていたようだ。

「……そんなに出来る訳ないじゃないですか」
「嘘じゃないよ。俺は回復が早いんだ。何だったら試してみるかい？」
ギクリと胸を突かれた様な衝撃が走る。
笠原は育代にセックスする事を誘っているのだ。
「し、ま、せ、ん！
もぉ！博司さんからも何か言ってやって！」
「まぁまぁ……それだけ育代が魅力的って事だよ」
空になった育代のグラスに酒を注ぐ。
ぷー、と頬を膨らませて育代は
なみなみと注がれたグラスを見つめた。

「博司さん、さっきからそればっかり！　後、飲ませ過ぎ！
もおっ！　今日は久しぶりにセックスするんじゃなかったの！」

平常時なら他人の前で
絶対言わない言葉を吐き捨てると
ヤケクソ気味に育代はグラスを口に運んだ。
上手く飲めないのか
酒はほとんど口元から流れ落ちてしまった。
酒が育代の喉、胸、腹と煌(きら)めいた筋を作る。
浴衣がはだけて露わになっている白い肌は
一層艶(なま)めかしさを増した。

「あわわっ……　ふきん、ふきん……」
慌てて立ち上がろうとする育代を相沢が制した。
笠原と三好もいつの間にか育代のすぐ近くまで距離を詰めていた。
「もったいないから舐めてあげるよ。育代さん」
そう言って相沢は育代を押し倒した。

相沢に続いて笠原も三好も育代に覆い被さった。
相沢が腕を抑えて三好が乳房にむしゃ振り付く。
笠原は育代の股の間で足を開かせている。
その光景はまるで妻がレイプされるかのようだった。

ついにこの時が来た。
何度も頭の中で思い描いた光景だったが、
いざ現実で目の当たりにすると
性的興奮よりも罪悪感や、危機感、
そして嫉妬が胸を支配していた。
やっぱり止めろと言うべきか、
このまま見届けるべきか、葛藤(かっとう)がせめぎ合う。

「なっ、何するんですかぁ?」
育代が困惑の声を上げる。
声色の中に緊張感はあまりなく、
事態を把握出来ていないようだった。
止めてと一喝でもしてくれれば止めようもあるが、
このままではどうしようもない。
この状況を作ったのは僕なのだ。
どっち付かずの心境で安易に止めに入る事は出来ない。

笠原が手際良く青代のショーツを脱がすと黒々とした茂みが露わになった。
日常生活では絶対に異性に見せない恥部だ。
剥き出しになった青代のアソコを笠原がペロンと舐める。

「あぁっ！　あぁん！」
突如上がった妻の甘い声が脳を突き刺さった。
下腹部がカッと熱くなり、
縮こまっていたペニスが見る見る大きくなっていく。
「あっ、あっ！　だめ、だめっ！　あっ！」
笠原の舌から逃れようと育代は腰を振っている。
いや、ひょっとしたら笠原のクンニが気持ち良くて
身をよじらせているのかもしれない。

育代の甘美な声が鼓膜を揺さ振る度に
後ろめたさが瓦解していった。
これが見たかったのだ。
妻が僕以外の男によって与えられる快楽であえぐ姿は
異常なほど性的魅力に溢れていた。
僕のペニスはかつてない程に勃起していた。
こんなに気持ち良さそうな声を上げる
妻を見るのは初めてだった。
興奮すると同時に悔しい気持ちが沸き上がる。

「やっ、あっ、あんっ！　ひっ、博司さぁん……！」

救いを求めるように育代が僕を見上げる。
怒気を孕ませた声や悲痛な声なら
怖気付いたかもしれないが、
笠原の舌で股を濡らしながらあえぐ
妻の甘い声で救いを求められても気に留まらない。

「笠原さんにアソコを舐められて
気持ち良くなってるのかい？」
「えっ、えっ？　あんっ！
だって、すごいんだもん……！
止めてよ、博司さん……！　あっ！」
笠原の舌は絶え間なく動いて
クリトリスを舐め回している。
時折、クリトリスを吸ったり
膣内に舌を突き出したりと様々な動きが見せた。
自在に動く舌は爬虫類を彷彿とさせる。
僕には真似出来そうにない動きだ。
酒の席で笠原は風俗嬢を気持ち良くさせて
その気にさせると言っていた。

「……良いじゃないか。
風俗嬢も喜ぶテクニックなんて
僕には無いからさ……
折角だから気持ち良くしてもらいなよ」
「そんな……　あっ！　あっ！」
「僕なんかがするより
よっぽど気持ち良さそうにしてるじゃないか」
「はぁはぁ……
博司さん、全然こんな事してくれないし……
あんっ！」
確かに僕は育代に
クンニなど数える程しかしていない。
だがそれも育代が恥ずかしがるから
アソコを舐められるのが
嫌なのだと配慮していたつもりだ。
僕が期待に背いているかのような
言い草を聞いて意地悪したくなった。

「僕が下手な分、笠原さんに気持ち良くさせて貰いなよ。
僕は育代のエロエロな格好を肴に飲ませて貰うから」

ニヤリと笑ってグラスを傾けた。
僕の突き離す台詞でショックを受けたのか、
育代はあえぎ声を抑えようとしているみたいだったが
どうしても艶のある息遣いは止められなかった。
無理に息を止めているものだから苦しそうだ。
快楽に耐える育代に相沢が声を掛ける。

「素直に気持ち良くなった方が博司君も喜ぶよ。
お酒でも飲みながら楽しみなよ。
と言っても寝たままじゃ飲みにくいし、
俺が育代さんに飲ませてあげよう」

相沢はそう言うと酒を口に含み、
育代の唇に顔を近づけた。

「んっ、んっ、んん……！」
唇と唇が重なり、
相沢の舌が酒と一緒に育代の口内へと侵入を果たす。
育代の可愛らしい舌が相沢の舌と触れあった。
自分の妻が他の男とキスしている光景は
胸に迫る物があった。
性器を舐められる事よりも衝撃的だった。
嫉妬と興奮で体に火が点いたかのように熱い。

「んー！　ん、んん！」
育代は相沢の舌を避けようとしているが、
舌を動かす度に相沢の舌も追うので
舌を絡め合うキスをしているようにしか見えない。
思わず息を止めて見入っていた。
震える手で酒を口に運び、一息つく。
「……相沢さんが飲ませてくれてるのに
零してるじゃないか。
ちゃんと飲んでごらん」
僕の言葉をどう思っただろうか。
育代は相沢の舌を避けるのを止め、
恐る恐る舌を舐め始めた。

「はっ、はっ、あっ！　んっ……　あっ！」
ピチャリ、ピチャリと育代が相沢の舌をすする。
抑えていたあえぎ声も戻っていた。
僕の妻は二好に乳首を、
笠原にクリトリスを舐められて
よがりながら相沢の舌を舐めている。
異様な光景だった。

「はっ、はっ、あっ！　んっ……　あっ！」
ピチャリ、ピチャリと育代が相沢の舌をすする。
抑えていたあえぎ声も戻っていた。
僕の妻は二好に乳首を、
笠原にクリトリスを舐められて
よがりながら相沢の舌を舐めている。
異様な光景だった。

「はぁ……　はぁ……」
青代は酔いが完全に回ったのか
目をトロンとさせて惚けた顔をしていた。
こんなにだらしない妻の表情は初めて見た。

「そろそろ良いだろ。
一番頑張った俺が一番乗りっつー事で」
笠原が勃起したペニスを露出する。
僕のよりも長くて太かった。
あんなのが育代に入るのかと思い息を飲む。
笠原がコンドームも付けずに
そのまま育代に挿入しようとするので慌てて止めた。
「あ、あのっ！　ゴムを付けてください！」
「あー、大丈夫大丈夫。
アフターピル持ってるから中出ししたって平気だよ。
後で奥さんに飲ませれば良いから」
アフターピルが避妊薬だという事は分かる。
だからと言って僕以外の男が
妻と生でセックスするのは抵抗があった。
しかし、この場の雰囲気と昂った性欲が邪魔をして、
これ以上文句を言えなくなってしまった。

「あうっ！　あうぅ……！」
亀頭が膣口にチャプリと触れたかと思うと、
あっと言う間に陰茎の根本まで膣の中に挿入された。
笠原の大きなペニスが育代の膣の中に入ってしまった。
とうとう妻が僕以外の男とセックスしてしまったのだ。
しかもコンドームを付けていない生のセックスである。
僕だけの女性だった育代が穢されてしまった。
喪失感で暗い気持ちになるものの、
何故かマグマのような熱い欲情が下腹部から沸いて
ペニスがガチガチに硬くなった。
ヌプ

「あっ！　あぅ……！」
笠原が腰を振るとグロテスクな陰茎が見え隠れした。
陰茎の形に合わせて育代のヒダが
広がったり狭まったりしてすっぽりと咥え込む。
膣奥に挿入されると恥丘が盛り上がり、
膣口まで抜かれると恥丘が沈む。
まさまさと笠原が妻とセックスする様を見せ付けられた。
「あっ、あぁ……！
博司さん、どうしたの？　いつもより激しい……！」
育代が虚ろな目でそう言った。
今セックスしている相手が僕だと思っているみたいだ。
周囲の状況が分からない程に酔ってしまったらしい。
それはそれで都合が良かった。
パン
パン

「育代がとっても魅力的だからさ。
こんなに絡み付いて
締まりが良いマンコなんてそうそうないぜ。
おっぱいも揉み心地最高！
こんなに良い女、高級ソープでもお目に掛かれねぇよ」
僕の真似だと思うけれど、
笠原が育代を呼び捨てで呼ぶのは少々腹が立った。
こちらの気も知らずに
調子付いた笠原は馴れ馴れしく育代に話し掛ける。
「育代も気持ち良いだろ？
今日のボクはいつもより大きくなってるから」
「うん……　どうしてぇ？
すっごい奥まで入ってるぅ……！　んん……！」
「育代を気持ち良くさせるためさ。それ！」
ぱん
ぱん

「あうっ！　あう！　あう！
すごい……！　すっごぉい……！」
笠原が乱暴に育代の膣を突く。
それなのに僕の妻は嬉しそうな
あえぎ声を上げて身悶えている。
妻が僕以外の男に犯されるのは夢にまで見た光景だったが、
現実で目の当たりにすると想像以上に切なくて苦しくて、
気が狂いそうなくらい煽情的だった。
今すぐにでも笠原を突き飛ばして
育代の濡れた膣に僕のペニスをぶち込んでやりたい。
その女は僕だけの女なんだ。
僕以外の男が育代とセックスするのは許されない。
そう思えば思うほど性欲が昂ぶり、
頭の奥からチリチリと熱を感じた。
パン
パン

「ほら、もっと気持ち良くさせてあげよう。育代はここ持ちな」
「はぁはぁ……！　はい……」
持っていた育代の足を自分で持たせて
笠原は育代のクリトリスへと手を伸ばした。

「はぅん！」
笠原の指がクリトリスの上をくるりと
周ると育代は甲高い声を漏らした。
顔に似合わず笠原が優しい手付きで
丁寧にクリトリスを愛撫する。

「あっ、あっ！　すごい……！　すごく良い……！」
「そうだろ？　クリトリスとおマンコ、どっちが気持ち良い？」
「どっちも良い！　はぁはぁ！　あう……！　痺れちゃう……！」
「ここを触られながらチンポ挿入れられるの気持ち良いだろ」
「うん……！　うん！　気持ち、良い……！」
「何が気持ち良いか言ってみな」
「指も！　おチンチンも気持ち良い！」
卑猥な言葉を吐きながらセックスに喜びあえぐ
妻の姿は妄想でもしなかった。
僕の中で育代に対する貞淑な妻と言うイメージが
ガラガラと音を立てて崩壊していく。
こんな一面もあったのか。
そして、何故その一面を見せるのが僕ではなく笠原なのか。
パン
パン

「変になっちゃう！　あぁ！　変になっちゃうぅ……！」
「良いねぇ。変になった育代もエロくて可愛いよ」
「はぁ！　はぁ！　博司さん……！」
「育代、こっち向きな」
笠原を僕だと疑わない育代はその可憐な唇を笠原へ向けた。
笠原は遠慮なく育代の唇に吸い付いた。
ぱい
ぱい

「んあ……！　ん！　はむ」
笠原と育代がねっとりと舌を絡め合う。
性欲の高まりがそうさせたのか、
いつになく育代は積極的にキスをしている。
お互いに舌を舐め合い、唾液を啜(すす)り合っている。

「あっ、あっ！　んっ！　あん！」
愛おしそうに唇を重ね、舌を絡め、セックスしている二人。
まるで愛し合っている男女ではないか。
「今日はどうしたの？
こんなにいっぱいするの初めてじゃない？」
「今までが早すぎたんだよ。
今日はたっぷり育代を可愛がってやるからな」
「嬉しい……　あんっ！」
言葉の端に相手の舌を舐めながら二人は喋っている。
育代がこんな淫乱な姿を見せるとは夢にも思わなかった。
心外でもあり、嬉しい誤算でもあった。
パン
パン

「後がつかえてるからな。
まずは一発目を出してやるよ。
育代！　中に出すぞ！」
「あっ、赤ちゃんできちゃうよ……！
良いの……？」
「あぁ！　俺の子を産めよ！」
パン　パン

「あう！　あう～～っ！」
笠原は陰茎の根本まで
育代の膣奥まで突き刺すと奥深くで射精した。
陰茎がビクビクと脈打ち、
しばらくすると濃くて白い精液が
育代の膣口から溢れ出した。
妻に中出しされたのだ……
笠原の精液によって
育代は子宮の中まで犯されてしまった。
ビュッビュッ

「はぁ……　はぁ……」
育代は膣から精液を垂れ流しながら
笠原の舌を求める。
舌が重なると嬉しそうに
ピチャピチャ音を立てて笠原の舌を舐めた。
アフターピルで避妊するとは言え、
妻に中出しまで許してしまったのは
間違いではなかったのか。
興奮のあまりに浴衣の下で射精してしまった
精液の始末を考えていると疑問が浮かんだ。

「あん！　イッたばかりなのに……！」
育代から笠原が離れると入れ替わりに三好が覆い被さった。
僕の妻とセックスするのが当たり前という空気だ。
二人目のペニスを妻は喜んで受け入れている。
三好は育代を抱いたまま気持ち悪い笑顔を振りまいた。
ヒクヒク

「あ～！　すごいよ、育代ちゃん！
温かくて柔らかくて良い匂いがする！
超気持ち良いッ！」
「あん……！　博司さん、ちょっと苦しい……」
三好は己自身も
膣内に入ろうとしているかのように
ペニスを膣に押し付けている。
小太りの肉塊が妻の華奢な肉体を押し潰した。

「うぅ……ッ！　出る！　出る！」
挿入してから数分と経たずに
三好は限界を迎えたようだ。
汚い尻が小刻みに震えた。
「あっ、あっ、あっ……！　出てる……！」
ビュ

三好の精液までも育代の膣内で射精されてしまった。
膣口からツゥっと濃い精液が零れ落ちた。
妻が汚されたという実感と共に性欲が燃え上がる。
僕の浴衣の下で再びペニスが硬度を取り戻していた。
笠原が酒を片手に笑った。
「早すぎだろ。ま、いいや。
その分、俺の番が早く回ってくるか」
「ちょっと待ってよ。
まだ全然してないんだからもうちょっと良いだろ？
育代ちゃん、育代ちゃん！」

「んっ……　あむっ」
萎えたペニスを挿入したまま三好が鼻息を荒くして育代の唇を貪る。
分厚い唇と可憐な唇が重なり、汚い舌が可愛い舌を舐めた。
育代は抵抗するどころか三好の舌を自ら絡ませている。

『はぁ、はぁ……　んん……」
卑猥な音を立てて二人は舌を舐め合い、絡ませ合う。
強く抱き締め合いながら
熱心に舌を絡ませ合う姿は恋人同士のように見えた。
そんな二人を見て笠原がせせら笑う。
「アイツ全然モテないし風俗にも行かないから
全く女っ気がないんですよ。
俺は平気だ、何て言っておきながら
やっぱり女に飢えてるんじゃねぇか」
なるほど、獣のように育代の体を、
唇を求めるのはそのためか。
三好のキスからは
性を意識し出した中学生のような必死さが垣間見えた。

「あっ……！　また大きくなった」
育代の膣内で萎えていた三好のペニスが勃起したらしい。
再び三好のペニスの感触を膣で感じて
育代は嬉しそうに呟いた。
酔っているからなのか。
妻がこんな風にセックスを喜ぶ女だとは知らなかった。
「うッ、やばい……！　出たばっかなのにすぐ出そうになる！
育代ちゃんの生マンコ、気持ちよすぎる……！」
三好は陰茎の根元まで膣に挿入したまま身動きを止めた。
射精するかどうか迷っているらしい。

「このままキスしよう！
挿入れてるだけで出ちゃいそうだけど
出来るだけ育代ちゃんを感じていたい！」
「うん。いっぱいキスして」
「はあぁ……！
育代ちゃんのマンコも気持ち良いし、
柔らかい体も気持ち良いし、
ベロも美味しくて気持ち良い！
最高だ……！」
「すごい体がピッタリする。溶けちゃいそう……！」
「溶けよう！溶け合おう！」

三好が素早く舌を動かすと
育代もそれに合わせて舌を舐めては吸った。
抱き締め合う力もお互いに増しているようだった。
育代は三好を僕と勘違いしているだけで、
あんな風に愛し合うのは本来、僕と育代なのだ。
そう考えても夫として何の慰めにもならないが、
男として欲情が掻き立てられた。

「出るっ！ 育代の中に俺の子種ぶちまけるぞ！」
「はぁ！ はぁ！ うん！ 出して！
赤ちゃん産ませて！」
「孕(はら)め！ 孕め！ 俺の子を孕め！」

「〜〜〜！　出てる……！　またいっぱい出てる……！」
また育代の膣内に射精されてしまった。
育代の子宮内は笠原と三好の精液で
タプタプに満ちているに違いない。
三好の赤ん坊を懇願して中出しされる妻を見て、
僕はまた射精してしまった。
ビュッ

妻が僕以外の男とセックスしている姿を見せられて
二度も射精してしまった僕はこの悪夢が早く終わるように願っていた。
性欲が治まれば理性的にもなるという物だ。
このままでは妻が僕の物ではなくなってしまうのではないかと恐怖が沸いてきた。
しかし相沢の行為により、
またもや僕は情欲を刺激されて性欲の権化と化してしまった。

「博司さん……　恥ずかしい……」
「いいじゃないか。
その人は育代が僕とセックスする所をどうしても見たいんだってさ。
よく見える所で見せてあげよう」
育代の目には僕が僕ではない何かに映っているらしい。
相沢の事を僕に見立てて、
僕の事は夫婦のセックスを覗き見る気持ち悪い人だと思っているのかもしれない。
相沢の計らいで僕は育代と相沢の結合部がよく見える場所に座らされた。
「ほら、動いてごらん」
「……はい」

育代が相沢の上で腰を振る。
腰を上げると膣口からヌメリ気のある音と一緒に陰茎が現れた。
腰を落とすとズブズブ音を立てて膣の中に陰茎が埋まって行く。
相沢は育代が自発的にセックスする様子を僕に見せ付けているのだ。
悔しいような、嬉しいような複雑な気分だが
僕のペニスはまたカチカチに硬くなってしまった。
ヌプ
ヌプ

「はぁ……！　はぁん……！」
育代が色っぽくあえいで腰を下ろし、相沢のペニスを膣内に咥(くわ)え込む。
先程までの二人は言わばレイプのような物だった。
だが相沢とのセックスは違う。
育代が自分から相沢のペニスを挿入しているのだ。
それも快楽に打ち震えながら嬉々としてセックスしているのである。
信じられない光景だった。
ズボッ
ズボッ

「どうした、もっと腰を使えよ」
「だってぇ……
こんなにたくさんしたの初めてだから、もう限界なの……！
何度もイッちゃって敏感になってるから
おチンチンが擦れるだけでイッちゃいそう……！」
「育代はだらしないなぁ。
よし、元気が出るおまじないをしてあげよう」
相沢がそう言って育代のクリトリスへと手を伸ばした。

「あう！　あぅん！　だめ、だめぇ！　イッちゃう……！」
「何だ。　じゃあ、止めようかな」

意地悪そうに相沢が笑う。
育代はしばし呼吸を整えた後、頬を上気させて懇願(こんがん)した。
「やめないで……　もっとしてぇ……」
相沢は口元を歪ませて再び育代のクリトリスを愛撫し始めた。

「あう！　あう！　あう！」
「そうだ、しっかり腰を振れよ。　観客もいるんだからな」
心遣いは有り難いが、もう十分過ぎる程である。
奇声に近いあえぎ声を上げながら
相沢のペニスを食る育代の姿はこの上なく官能的で劣情を煽り立てた。
心臓が早鐘のように鳴って背筋から頭に掛けて痺れる熱さが走る。
また射精してしまいそうだ。
「もっ、も、も、も……！　もう、だめ……ッ！」
ちゅぷ
ドキッ

「あ～～ッ！　あっ、あっ！　あ～～～ッッ！」
育代は腰を大きく震わせて絶叫した。
尿道から透明な液体が勢いよく噴き出して僕の顔に掛かる。
ペロリと舐めてみた。
味なんか分からない。
ただ、この液体を舐めると脳が快楽で喜ぶという事は直感で分かった。
育代の股間に吸い付いて
直接この液を舐め回したい欲求に駆られる。
腰を上げそうになったが
すんでの所で踏みとどまった。
相沢のペニスに顔を近づけたくないし、
何よりも今の僕は彼女らにとって
観客であり部外者なのだ。
二人の邪魔をして行為を止めたくなかった。

「動きが止まっちゃってるよ」
「はぁ！ はぁ……！ ちょっと……！ 休ませて……！」
「夫が満足してないのに放っておくのかい？ 妻失格だな」
「あっ、あっ…… ご、ごめんなさい……！ 今、やりますから……！」
クラクラする真っ白な頭の中で認識が曖昧になってきた。
彼らが本当の夫婦で、僕は彼の妻に横恋慕している男なのかもしれない。
恋心が募ったばかりに彼女を自分の妻と錯覚していたのか。
それも納得するくらい彼の奥さんは魅力的だった。

「あうぅ……！　あなた……！　そこを触られてると、動けない……！」
「駄目だ。頑張って動きなさい。じゃなきゃ離婚かな」
「そんな……　頑張るからそんな事言わないで……」
「良い子だ。愛してるよ、育代」
「私も……！　愛してる……！」
奥さんは意を決して夫のために腰を上下させた。
ガクガクに震える足を手で押さえて懸命に動かした。

「あふっ！　あぐっ！　ひぅ！」
奥さんの端正な顔立ちが快楽で歪んでしまっている。
それすらも美しい。
この女性とセックス出来たらどんなに嬉しい事か。
僕は目を皿のようにして愛し合う夫婦のセックスに魅入っていた。
ビチャ
ビチャ

「はぁ！ はぐっ！ んっ……！ んぎっ！」
奥さんはもうフラフラだ。
それでも健気に腰を振って夫のペニスを膣に押し込んでいる。
妻の奉仕に夫は口端を釣り上げて笑った。
「頑張ったな、育代。ご褒美に中出ししてあげよう」
「はひぃ！ ちょうだい！ 子宮にあなたの精子ちょうだい……！」

「あーっ！　あっ、あっ……！　あう！　あうぅ……！」
ついに夫は妻の膣内で射精した。
精子が卵子に向かって駆け巡る様子が目に浮かんだ。
どくどくっ

「しっかり妊娠しろよ」
「はい……　妊娠します……」
僕は射精した。
夫婦の子作りセックスを目の前で見れて満足だった。
緊張の糸が切れて、意識が遠のいていく。

あれからどれくらい経っただろう。
いつの間にか三人の男たちは部屋から消えていた。
記憶が定かではない。
思い出そうとしてもコマ送りの映像が断片的に浮かぶだけだ。
経過はともかく結果はハッキリしている。
男たちの手によって、僕の妻が滅茶苦茶に犯されたのだ。

人間として、女として、母親として……
そして妻として何ら落ち度もない育代は
愚かな夫の所為で今日初めて知り合った男たちに乱暴された。
ただ夫の好奇心を満たすためだけに凌辱されたのだ。
育代は穏やかな表情を
浮かべて寝入っている。
何も知らない顔だ。
僕以外の男とセックスした事も、
その男たちにイかされた事も、
男の上で腰を振っていた事も、
幾度となく中出しされた事も。

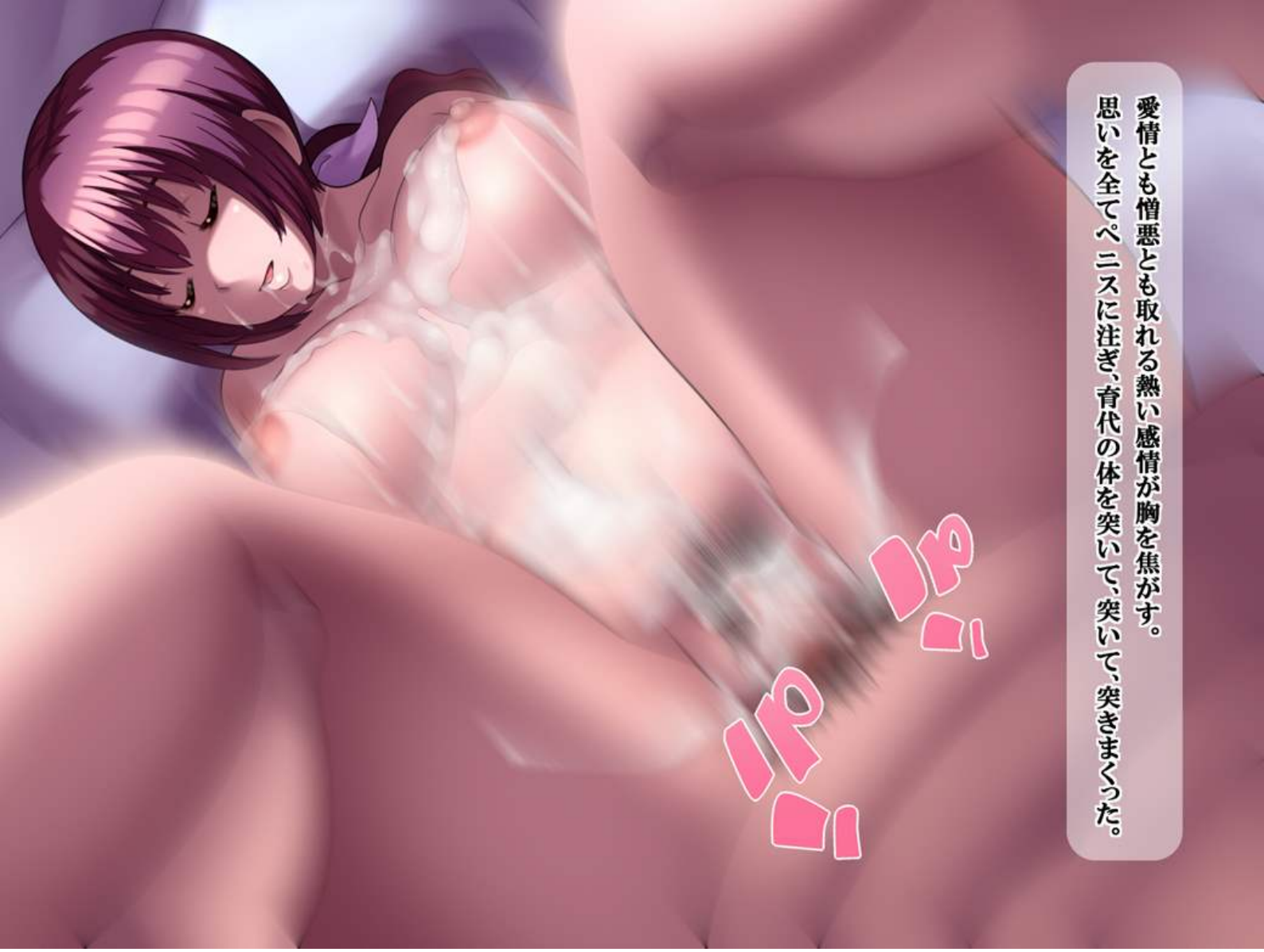
メリメリとペニスが音を立てて膨(ふく)れ上がる。
何度も射精してバリバリに固くなった浴衣を脱いだ。
今こそ僕たち夫婦がセックスする時だ。

「ん……」
ペニスを挿入しても育代が起きる気配はなかった。
微かに呼吸を乱しただけで先程と変わらず寝息を立てている。
あれ程、淫らによがり狂った妻が僕相手だと何も感じないのか。
怒りに身を任せてペニスを育代に突き立てる。
起きようが知った事ではない。
ズプ

「ん、ん……」
育代の中は冷たく濡れていた。
陰茎を引き抜く度に膣から精液が零れる。
掻き出さなくては。
妻の膣内から男たちの毒液を掻き出さなくては。

おぼろげだった記憶が甦(よみがえ)る。
三人に愛撫された育代。
笠原とのセックスに喜びあえぐ育代。
三好と恋人同士のように抱き合い唇を貪っていた育代。
そして相沢のペニスを自ら咥え込み恍惚(こうこつ)の表情を浮かべていた育代。
ペニスは見る見る硬くなり、膣内で最大に勃起した。
パン
パン

いつもならすぐに射精してもおかしくない快感が亀頭を刺激している。
止めどなく増していく快楽に包まれながら何度も育代の膣を突いた。
パン
パン
男たちとのセックスによって歪む
育代の顔が頭をよぎる。
僕とする時は
あんなに気持ち良さそうにしない。
なりふり構わず
舌を絡めるような事もしない。
獣のように快楽を興じる姿なんか
見た事ない。


愛情とも憎悪とも取れる熱い感情が胸を焦がす。
思いを全てペニスに注ぎ、育代の体を突いて、突いて、突きまくった。
パン
パン

凄まじい何かに頭の中を掻き回されて、脳がグチャグチャと揺さ振られた。
急に全身が震えて力が入らなくなり頭が白くなった。
体の機能が突然プツリと切れたのかと思ったが、
しばらくして射精したのだと気付いた。
ビュルビュルビュル

愛しい妻を抱き締める。
心地良い快楽の余韻の中、僕は深い眠りに落ちた。

「おはよう。ぐっすり眠ってたね。よっぽど疲れちゃった？」
「ん……あぁ、おはよう……」
朝、普段と変わらない妻の姿がそこにあった。
あれは夢だったのだろうか。
寝惚け眼を擦り、昨夜の事を思い出す。
頭の覚醒と共に罪悪感が膨れ上がってきた。
僕の所為で育代が汚れてしまったのだ。
心臓が高鳴る中、妻に掛ける言葉を必死で探す。

「お酒を飲んでからよく覚えていないんだけど、あれからどうしたの？」
本当に覚えていないのだろうか。
いつもと同じ調子で話す育代に
いくらか安心したが、
問題はどこまで記憶があるかだ。

「……育代が潰れちゃってから相沢さん達は帰ったよ」
「やだぁ、恥ずかしい所を見られちゃった。
も～、博司さんが何度も飲ませるから」
「う、うん。ごめん……」
「私、変な事しなかった？　全然覚えてないの」
育代は屈託のない笑顔を僕に向けてくれた。
本当に昨夜の事は覚えていないらしい。
胸に巣食っていた不安が霧散していく。
少なくとも育代の心を傷付けずに済んだのだ。

「セックスする時の育代はすごくエッチだったよ」
不安が取り除かれて気分が高揚した僕はつい軽口を叩いてしまった。
「えーっ！　そうなの？　全然覚えてない……　恥ずかしい……」
「すごく良かったよ。何度もしちゃった」
「だからなの？　起きたら体中……
お布団までガビガビなんだもの。びっくりしちゃった」
「あ、あぁ……」

「博司さん、そんなに我慢していたの？　いつもは全然しないのに」
「う、うん……
家だとほら、みゆきがいるからどうしても気を遣っちゃうだろ……？
嫌だった？」
「ううん、嫌じゃない。　覚えていないのが残念！」
育代の笑顔が眩しい。
愛しさが込み上げてくる。

「……ゴム使わなかったの？　起きたらお腹からいっぱい出てきたよ？」
精液の事だろう。
その精液は僕のだけではない。
相沢や笠原、三好の精液も育代の子宮内に蓄積されていたのだ。
「危ない日なんだけど……　良いの？」
そうだった。
まだ育代にアフターピルを飲ませていない。
このままでは誰の子か分からない赤ん坊を
育代が妊娠してしまう。
相沢がテーブルの上にそれらしき錠剤を
置いて行った事を記憶の片隅から思い出す。

「相沢さんがアフターピルをくれたんだよ。
あった、これこれ。これを飲んで」
慌てて育代に錠剤と水を渡す。
確かセックスから十二時間以内なら効果があると言っていた。
まだあれからそんなに経っていない。
「そんなのあるんだ。
相沢さんって遊び慣れてるのね」
「……あぁ、そうかもね」
その相沢にお前も遊ばれたんだ。
絶対に口に出来ない言葉を
心の中で呟いた。

「博司さん、お風呂入ってきたら？　ベトベトで気持ち悪くない？」
「あ、うん。　そうだね。　あれ、育代は？」
「あなたが寝ている間に入りました。
出掛ける準備してるね。
明日には帰らなくちゃいけないし、今日は目一杯羽を伸ばしましょう」
そうだった。
僕たちは夫婦水入らずで
旅行に来ていたのだ。
本来の目的を思い出した僕は
風呂に入る準備をしながら
一日の予定を考える。
どこへ行くかは
予め下調べしてあるから
問題ない。
問題なのは、夜の予定だ。

夫婦仲良く肩を並べ、手を繋(つな)いで外へ出る。
旅館を出た途端に潮風が頬を撫で付けてきた。
海の匂いが晴れやかな気持ちにさせてくれた。
二人っきりのデートは久しぶりだからか育代は嬉しそうだ。
ピッタリと体をすり寄せてくる。
寄り添う育代は僕を見上げて朗らかな笑顔を見せてくれた。
少女のようにはにかむ妻を愛おしいと思った。

結婚から十年以上経った今でも妻は僕を愛してくれている。
可愛い娘だっている。
今の生活に不満などあるはずがない。
しかし、一抹の不安が胸を燻っていた。

風呂に入っている時に相沢からメールが届いていた。
いつの間にか連絡先を交換していたらしい。
「昨夜はありがとうございました」という決まり文句から始まり、
昨夜行われた乱交について書き綴られていた。
字面で見ると昨夜の記憶がまざまざと蘇り、懺悔の念に駆られた。
妻を無理矢理酔わせて合意の上もなく
男とセックスさせるなど鬼畜の所業と言えよう。

しかし何故だろう。
妻と男たちとのセックスはこの上なく刺激的で甘美だった。
快楽とはあぁ言う感覚を言うのだ。
今までの僕は性行為に対して強い欲求を抱く事はなかったが、
妻が僕以外の男に抱かれる事に関しては欲望が理性を凌駕した。
一歩間違えば破滅である。
家庭を失ってしまう事になる。
だがどうしても抑制が効かないのだ。

相沢からのメールには今夜も育代を抱かせてくれませんかとあった。
断るのは簡単だ。
元々何の接点も持たない人間だから遠慮も必要ない。
断るのが普通だと分かっているが、あの耽美な味を知ってしまった今、
断る事など出来なかった。
例え破滅と隣り合わせだとしても、こんな機会は二度とないかもしれない。
旅行という非日常が背中を押してしまった。

今日はどうする？
どうしたいのかは分かっているが、実行まで移すのに躊躇した。

心に靄が掛かったまま育代と並んで浜辺を歩く。
潮騒の音が耳に心地よい。
鬱屈した気分が少しは晴れた。
「みゆきが産まれてから二人で海に来るなんて初めてじゃない？」
「そうだね……」
季節外れの海に人影はない。
もしも今が夏だったら海で泳ぐのもいいかもしれない。
水着姿の育代を想像した。

育代の美貌なら
若い娘にも引けを取らないだろう。
言い寄ってくる男もいるはずだ。
育代を抱きたい連中が舌なめずりして
水着の下を妄想する。
そんな男たちに妻を抱いても良いと言ったら
食い付いてくるに違いない。

人気のない場所へ連れられて
セックスする育代と男たち……
海の中でセックスするのも良いかもしれない。
一夏の恋を求めて来る男もいるだろうから
育代とセックスさせるだけなら
都合が良いのではないだろうか。

育代が温泉に入りたがったので温泉に入る。
最近出来た温泉らしく外観が綺麗で若いカップルが目立った。
「旅館にも温泉があるのにわざわざ入りに行かなくてもいいんじゃない？」
「色んな所の温泉に入ってみたいじゃない。……いや？」
「育代が入りたいなら良いよ」
「ありがとう。博司さん」
残念ながら混浴はなかった。
男湯は若い男たちが多かった。
僕同様に恋人が温泉に入りたがって
仕方なく自分も入ったのではないかと勘繰る。

相沢の言葉を思い出した。
若い男が育代に夢中になって、育代も若い男に夢中になる……
遊び慣れた若い男のセックスはどういうものだろう。
引き締まった体で荒々しくセックスされる育代を想像する。

若い雄のセックスで雌の顔になる育代が浮かんだ。
若い男とセックスするのに夢中になっている育代を見たら
相沢たちのセックスとは比べものにならない程ショックだと思う。
若さばかりはどうしない。
だからこそ一層妄想は燃え上がった。

恋人岬という場所を訪れた。
カップルや家族連れが多い。
「ここの鐘を愛し合う二人で鳴らすと幸せになれるんだって」
「そうなんだ……」
妻が男に犯される事ばかり空想する僕は
育代を愛する気持ちを失ってしまったんだろうか。
いや、お互いに愛している気持ちは結婚前から変わらないと思う。
年月を重ねて結婚前より愛が深まっていると言える。

愛が深まった結果がこれなのか。
夫婦連れを見かける度に
妻を交換してセックスする光景が頭をよぎる。
育代は若く美しい。
スワッピングを持ち掛ければ
大抵の男は首を縦に振るはずだ。
自分の妻の目があって出来ないというのであれば
この際スワッピングでなくても良い。
育代を抱いてくれるだけで良い。

男は喜び育代の膣にペニスを擦り付ける。
育代は恥ずかしそうに
男の欲望を体で受け止める。
妻を交換しているのだから
妻を妊娠させるのも夫の自由である。
育代の子宮に子種が入り、懐妊する……
愛の鐘を育代と二人で鳴らしながら
こんな事を考えていた。

今日の僕はどうかしている。
どこへ行っても気が付けば
淫靡な空想に耽ってしまっていた。
育代が他の男とセックスする妄想が止まらない。
どうしてこんな風になってしまったのだろう。
育代が女性的魅力に溢れているから
男として気後れしているのかもしれない。
いや、僕がセックスに自信がないから
精力的な男たちと育代がセックスして
満足する様子を見たいのかもしれない。

考えても理由は分からない。
分かるのは、
僕が育代と他の男がセックスする事に
異様に興奮するという事だけだ。
気持ちはもう固まっていた。
僕は妻がセックスしている姿を見たい。
頭の芯から痺れるあの感覚を
もう一度味わいたい。

僕たちは旅館に戻ると露天風呂へ入った。
今日は相沢たちもいない。
貸切状態だ。
「やっぱり誰もいない方が落ち着くわね」
「そうだね」

「……博司さん、あんまり楽しくなかった？
今日は一日中何か考え事してたみたい」
「え！　うぅん、楽しかったよ。
育代の事が好きだなぁって考えていたんだ」
「本当に？　それだったら良いけど」

「私も博司さんの事が好き。
今日はすっごく楽しかった！
また二人で旅行行きたいね」
愛しい妻の真っ直ぐな笑顔が眩しい。
僕の心はこんなにも歪んでしまっているというのに。

「これからもずーと一緒にいようね。
おじいちゃんとおばあちゃんになっても」
「あぁ、死ぬまで一緒にいような。愛してるよ、育代」
「私も愛してます。あなた」

妻からの愛情が胸に染み渡って温かくなる。
こんなにも愛し合っているのに
何故僕は妻を裏切るような真似をするのだろう。
最後の最後まで迷っていたが、意を決して育代に言う。

「……相沢さん達がまた一緒に飲もうって言ってるんだけど良いかな。
いいよ、って言っちゃったんだけど……」
「えー……　昨日も恥ずかしい所を見られたったみたいだし……
それに明日は帰るんだから今日は博司さんとゆっくりしたい……」
「駄目かな？」
「……わかりました。
今日は私の行きたい所に連れてってくれたから
私も博司さんの言う事聞きます」
「ありがとう……」
もう後戻りは出来ない。
今夜も僕の妻は三人の男たちに犯されてしまうのだ。

一緒に飲んだ方が楽しいという僕の言い付けを守ってか
今夜の育代は最初から良く飲み、昨夜よりも酔いが早く回っていた。
胸元も足元も開けて淫(みだ)らな格好で酒を飲んでいる。
男たちの良い肴(さかな)だ。
笠原の品のない一発芸に
育代がケラケラ笑うのを見て相沢が耳打ちしてきた。

「そろそろ良いんじゃないですかね」
「……そうですね」
「昨日の事は全然覚えていないって話でしたから色々出来そうですね」
「……あんまり無茶させないでくださいよ」
「分かってますよ」
相沢はニヤリと笑うと酒瓶を持って育代へ近づいて行った。
何をするのか胸をバクバクさせて成り行きを見守る。

「奥さん、飲んでます？」
「飲んでますよぉ。飲んでるのに皆さん、どんどん注ぐから全然減らな～い」
「高くて良い奴だから奥さんに飲んで欲しいんですよ。美味しいでしょ？」
「おいしいけどぉ……　おいしいけどぉ……」
「一番美味しい飲み方って知ってます？　ワカメ酒って言うんですけど」
「ワカメぇ？　あるんですかぁ？」
「くくっ。持ってるのは奥さんですよ。
奥さんの股の間に酒を注いで飲むんです。
陰毛が酒の中でワカメみたいにそよぐからワカメ酒」
「やだぁ～、相沢さんったら。そんな恥ずかしい事しませんよぉ」
「博司君が飲ませてくれるって
言ってましたよ。ね、博司君」
突然話を振られて動揺した。
訳も分からず返事をする。

「う、うん。やってあげなさい、育代」
「ほら！　博司君もあぁ言ってる。じゃぁ奥さん、パンツ脱ごうか」
「え～……　やらなきゃいけないのぉ～？」
育代が救いを求める目で僕を見てくる。
僕は黙って頷いた。
渋々と言った様子で育代は
ゆっくりパンツを脱ぐと
陰部を隠すように座った。

足と足をぴったり閉めた
育代の股間に酒がなみなみと注がれた。
説明があった通り、陰毛が酒の中でゆらゆら揺れている。
陰毛という恥ずかしい恥部を晒しておきながら
育代からはさほど恥ずかしがる様子は窺(うかが)えない。
相当酔っている証拠だ。

「もれる、もれる！　早く飲んじゃってぇ！」
そこにある酒を飲むという事は
育代の股間に顔をくっ付けるくらい
近づけるという事だ。
それなのに妻は早く飲んで欲しいとせがんでいる。
今まで気分がいまいち盛り上がらなかったが、
下腹部が熱くなると同時に気分は高揚してきた。
「そんじゃ俺から～！」
笠原が右手を高らかに上げて名乗り出た。
顔には好色そうな笑みが浮かんでいる。
今の育代は誰が陰部に顔を近づけようが構わないらしい。
零(こぼ)れるから早く飲めと手をパタパタさせているだけだ。

笠原が育代の太腿に覆い被さって股間に顔を埋めた。
ズゾゾと音を立てて笠原は酒を吸う。
僕以外の男が妻の股間に顔を埋めるなど
普通なら絶対にあり得ない状態だ。
頭にチクチクと痺れが刺す。
これだ。
この感覚だ。
この感覚がどうしようもなく心地良いのだ。

「ちょ！　ちょっ！　ちょ～！
ちょっと笠原さん！
おけけ吸っちゃだめぇ～！」
育代のワカメ酒を飲み干した笠原が
陰毛を吸っているようだ。
ここに来てようやく育代は
下腹部に響く恥じらいを見せてくれた。
腰をよじって笠原の舌から逃れようとしている。
「クリちゃんまで舐めれりゃ話が早いんだがな」
「そんなの舐めさせませんー」
濡れた陰毛を露わにして育代がクスクス笑う。
淫らな妻に下半身がグッと来る。

「それじゃ、もう一杯！」
「んもうー！　こぼれちゃうってばぁ！」
「平気、平気」
座布団を濡らす事ばかり気にして
ワカメ酒をする事には抵抗がないらしい。
二番手に三好が名乗りを上げた。
三好が育代に近づき、笠原はより育代へ近づいた。

「ワカメ酒のお礼に
育代ちゃんには竿酒を飲ませてあげるよ」
そう言って笠原は反り返っているペニスに
酒を注いで育代の眼前へ突きつけた。
「おっきい……　じゃなくてぇ！　そんなの舐めません～」
育代がプイと顔をペニスから背ける。
興が乗ってきた僕は育代をけしかける事にした。
昨日はセックスばかりでフェラチオを見ていない。
是非とも妻が僕以外のペニスを頬張る姿を見てみたかった。

「お酒がもったいないし笠原さんに悪いだろ？　全部綺麗に舐めなよ」
「博司さんが言うなら良いけど……　おチンチンだよ？」
「うん。笠原さんのおチンチンを舐めてごらん」
「えぇ……？　へへへっ」

育代が顔を歪ませて小さく笑う。
笠原のペニスへ顔を向けるとあっさり亀頭を飲み込んだ。

「ん……　お酒の味とおチンチンの味がするぅ」
「へへっ、おチンチンの味ってどんなの？」
「しょっぱくって……
蒸れた臭いで……　くっさぁい」
三好が育代の下腹部に顔を埋めてワカメ酒をチビチビ飲む中、
育代はペロリ、ペロリと笠原の亀頭を舐めた。
男の性器を舐める妻の姿はいやらしかった。
用を足すか射精するかどちらかしか使い道のない
汚らわしい男性器をペロペロ舐めている。
夫の僕の目の前でだ。

「もっと喉の奥まで入れなよ」
「これひようむりぃ。 おえってなうぅ」
「にしたってもっと吸うとかさぁ……
博司くぅん、育代ちゃんフェラ下手くそだね」
ニヤニヤ笑って笠原は僕に言う。
僕の妻にフェラチオさせておきながら僕に文句を言う笠原に腹が立った。
同時に下腹部もカッと熱くなる。

「フェラなんて家でも
ろくにやってくれませんからね……
笠原さんが育代に
教えてやってくださいよ」
「おー、良いよ。
育代ちゃん、チンコで一番気持ち良いのはカリのとこなんだ。
そこ重点的に舐めてよ」
「あむっ。ここれすかぁ」
「そう、そこ！ もっと強くベロ擦り付けて……」
笠原が育代にフェラチオのレクチャーを始めた。
育代は言われるままに亀頭を口に含み、カリ首を舐め、陰茎に唇を這わせた。

「おっ！　いいねぇ！　そんな感じ！　もっと強く吸ってみて！」
「ふぁい」

汚い音を育代が鳴らす。
勢いよく亀頭を啜る妻の唇からは卑猥な音が奏でられた。
淑やかで品のある育代が
下品な音を立てながら笠原のペニスに吸い付く姿は信じがたい。

「ハッハッハ、良いねぇ。おチンチン美味しいか？」
「別においひくないれす」
「そういう時はオチンチン美味しい！って言うんだよ」
「ふぁい。……おチンチンおいひぃ」

貞淑な妻は見る影もなかった。
育代の卑猥な台詞に男たちが噴き出した。
僕もつられて笑う。
とっくにワカメ酒を飲み終わり、
しばらく育代の陰毛にしゃぶりついていた三好が音を上げた。

夫以外の男のペニスを頬張りながら言う台詞ではなかったが、
まだ最後の一線を守るくらいには理性が残っていたらしい。
拙い妻のフェラチオにも飽きたのか笠原が言った。
「まだ酔いが足りねぇんじゃねぇの。面倒臭ぇ、手っ取り早く酔わせるか」
そう言って笠原は育代に咥えさせていたペニスを
唇からチュポンッと引き抜く。
笠原の亀頭から育代の唾液がだらりと滴(したた)り落ちた。

「なにするんですかぁ……？」
笠原が育代は足を掴むと仰向けにさせて、
そのまま体を折り曲げさせた。

「やぁん！　見えちゃうからぁ！
色々見えちゃうからぁ……！」
育代が陰部を露わにした
恥ずかしい格好で身をよじる。
しかし笠原と三好に太ももを
押さえられて
身動きが取れないでいた。
大股を広げさせられた体勢は
アソコもアナルも良く見えた。
アソコなどピンクの具はおろか、
赤い膣内まで
見えてしまっている。

「こっちのお口から
飲ませてあげるよ」
一升瓶をタプタプ鳴らして
笠原が言う。
そんな所に酒を入れて
大丈夫なのかと緊張が走る。
止めに入ろうとした所を
相沢に宥(なだ)められた。

「粘膜からアルコールを吸収すると
酔いが早く回るんですよ。
結構よくあるプレイのひとつなんです」
「……そうなんですか？」
「そうそう。
酔いが早く回るだけじゃなくて
敏感になって気持ち良くなるんですよ」
彼らにとって僕らは
今後関わる必要のない人間だ。
だから育代を粗末に扱うのも
厭わないのではないかと
不安になったが
よくあるプレイというなら
健康を害する事もないだろう。

妻を他人とセックスさせるとは
こういう事なのだ。
彼らの裁量に妻を委ねるしかない。
僕が見守る中、
笠原は育代の膣口に
一升瓶の飲み口を当てた。

「えっ？　なに、なに……？」
トクトクと音を立てて
一升瓶の中から酒が
育代の膣内へ注がれる。
異物が体内に入って来るというのに
酔っている育代は
困惑の笑みを浮かべるだけである。

「あつっ！　な、何？　熱い！
あついよぉ……！」
アルコール度数の高い酒が
育代の膣内を焼く。
苦しそうにあえぐ育代を
男たちは舌舐めずりして
見下ろしている。
「博司さぁん……！
ひろしさぁん……！」
育代の助けを求める声が
胸を突き刺す。
妻の膣に酒が流される所を
僕はただ見守る事しか出来ない。

「あんっ！　やだぁ、だめぇ！」
一升瓶を置いた笠原は
クリトリスを愛撫し始めた。
一番敏感な部分を触られて
育代は高い声を上げる。
「あっ！　あっ！
やだぁ……
ジンジンして……
変な感じ……」
悲鳴混じりだった育代の声が
次第に色めいていった。
トロンとしている目は
焦点が合っていない。
酔いが完全に回ったのだろう。
笠原の酒に濡れた指が
クリトリスを擦ると
育代は嬌声を上げた。

「こっちにも入れてやろうか」
不敵な笑みを浮かべて笠原は
育代の尻穴にも
一升瓶の酒口を当てた。

「いたっ！　あっ、あっ！
お尻にも何か入ってくるぅ……！」
無理矢理アナルに酒口を
押し入れて直腸にも中身が流された。
排泄する穴に酒が
トクトク入って行く。
「あぁ……！　熱い……！
おなか全部あつい……！」
膣と直腸で酒を飲まされた育代は
力が完全に抜け切っていた。
体内をアルコール漬けにされて
グッタリしている。

「それ以上はマズイんじゃ……！」
「大丈夫、大丈夫」
急性アルコール中毒を
心配する僕を尻目に
笠原は喜々として答えた。

「どう？
育代ちゃん、気持ち良いでしょ」
再びクリトリスを愛撫し始めた
笠原が育代に問う。
育代は笠原の指を
気持ちよさそうに受けながら
弱々しく呟いた。
「気持ち良いよぉ……
博司さん……」
「おっ！
博司君モードに入ったぞ」
男たちがドッと笑う。
状況を理解出来なくなった育代は
自分を愛撫しながら
笑う男に小首を傾げた。

「俺は笠原だよ。博司君はあっち」
「笠原さん……？」
「そうだよ。
これから俺と育代ちゃんが
セックスするんだ」
「なんでぇ……？」
「博司君が俺と育代ちゃんが
セックスする所を見たいんだってさ」
「そぉなのぉ……？　博司さん……？」
トロンとした目で
育代が僕に問い掛ける。
大丈夫だ。
ここまで酩酊状態になった育代は
何があっても明日の朝には
すっかり忘れているはずだ

「……うん。
育代が笠原さんと
セックスしている所を見たいな」
「んー……　わかった……」
笠原と三好から
解放された育代は
フラフラ立ち上がり、
肘に掛かっていた浴衣を
躊躇なくストンと脱ぎ落とした。

ズッ
「んん！　んん……！」
笠原の陰茎が育代の膣口まで
いとも容易く挿入された。
当然、今日もコンドームを付けていない
生のセックスだ。
育代は笠原とセックスしながら
三好の腰に手を置いてペニスを頬張った。
起きてからずっと妄想していた
妻の痴態を見れて興奮は最高潮に達している。
睾丸がグツグツと煮えたぎり、
頭に白い靄が掛かった。

パン
パン
「酒入りマンコは効くなぁ～。
育代ちゃんも俺のチンポ気持ち良いだろぉ？」
「んん！　ひもひいい……！」
「あ～……　育代ちゃんが喋ると
良い感じに甘噛みされて気持ち良いわぁ。
俺のチンポは美味しい？」
「おいひぃ……　おひんほおいひぃれふ」
育代は尻や乳房、全身の肉を揺らして
笠原のペニスにあえぎ、
懸命に三好のペニスを咥え込む。
昨夜は体を重ねる男たちを
僕だと勘違いしていたが、
今の育代は彼らが僕ではないと知っている。
それなのに後ろから挿入されるペニスで
気持ち良くなり、目の前のペニスを
美味しそうに舐めている。
何て淫乱な妻の姿なんだ。

「あー！　良いね！
育代ちゃん、気持ち良いよ！」
笠原のペニスで練習した
フェラチオの成果を三好に見せる。
家ではフェラチオなんて
あまりしてくれないし、
やっても軽く舐めるだけなので
大して気持ち良くはなかった。
僕にもあんな風に下品なくらい
激しくフェラチオして欲しい。
じゅぷ
じゅぷ
ぱん
ぱん

「おっ、ちゃんと教えた通りに
出来てるじゃないの。
よしよし、奥の方まで掻き混ぜてやろう」
笠原は育代の腰をガッシリ掴むと
ペニスを深く挿入したまま
腰をグリグリ回した。
パン
パン
ジュプ

ズプ
「あうぅ……！　はぅん！
すっごい……！　すっごい頭に響くぅ……！」
育代は三好のペニスから口を離し、
笠原の突きによがり狂った。
セックスの快感にあえぎ声を震わせて顔を歪める。

「へへっ。奥まで届くだろ？
俺のチンポでかいから」
「うん……！　すごいぃ……！
きっ？気持ち良いとこに当たってるぅ……！」
「旦那のチンポより気持ち良いだろ」
「うん……！
博司さんのおチンチンよりすごい……！」
殴られたような衝撃が下腹部を襲う。
育代と笠原に馬鹿にされて
何故こんなにも興奮するのか。
僕とのセックスでは見られない
育代の艶やかな表情に見惚れた。

「俺のチンポも舐めなきゃ駄目だろ～」
「ふぁい……　んん……！」
遅れを取り戻すように育代は
三好のペニスを啜った。
口内でめまぐるしく
舌が動くのを見て取れる。
レロ
レロ

「エロいなぁ、育代ちゃん。
アナルがひくひくしてやがる。
おい、相沢。ローション取ってくれ」
笠原の言葉に相沢は頷くと
ビニール袋から
ペットボトルのような筒を取り出した。
それを渡された笠原が
筒の中身を育代の背中に掛けて
乳房からお尻に伸ばす。
チュル
ニチャ
ヒクッ

「こっちも試してみるか」
透明な液体でヌルヌルになった
育代の体を撫で回した笠原は
育代のアナルに粘液を
たっぷり付けた親指を挿入した。
……！

「あの！　お尻でした事はないので……！」
「普通しないよねぇ。大丈夫、大丈夫。
ちゃんとほぐしてるから。
さっき酒入れたしあんま痛くないでしょ？
育代ちゃん」
育代は黙って
三好のペニスをしゃぶり続けている。
んっ

「ほら、大分ほぐれてきた」
笠原が育代のアナルに親指を
小刻みに出し入れする。
粘液の滑りを手伝って挿入がスムーズだ。
育代の表情からも
苦悶が和らいでいる気がする。
はぷ

ぱちゅん
ぱちゅん
ジュプ
ジュプ
ジュプ
「お尻をいじられながら
セックスするのはどう?」
笠原の問いには答えず、返事の代わりに
三好のペニスを勢い良く啜り立てた。
快楽に負けじと
フェラチオに励んでいるように見える。
先に根負けしたのは三好だった。

「出るよ、育代ちゃん！　全部飲んでね！」
三好が育代の頭を強く掴み、腰を震わせた。
じゅぷ
じゅぷ
パチュン
パチュン

「んっ！ んっ！ んっ！」
言われた通りに育代は三好の精液を飲んでいる。
コクコクと喉を鳴らして
一生懸命精液を飲んでいる妻だったが
小さな口からは大量の精液が零れてしまっていた。
パ
パ
パ
ビュッ
チュルル

ヌプ
ヌポ
「おぐっ……！　はぁ！　はぁ！」
「ほら、育代ちゃん。奥まで入っちゃってるよ。
中で指動いてんの分かる？」
笠原の親指は付け根の方まで
育代のアナルに包まれていた。
直腸の中でグルグル指を回しているのが分かる。
「変な感じぃ……
入れた時はちょっと痛かったけど、
今はジンジンして気持ち良い……」
「酒入ってるからねぇ。
アナルも気持ち良いもんだろ？」
笠原は親指をつま先から指の付けねまで
ヌポヌポ素早くアナルに出し入れした。

「あぁ……！　いい……！　気持ち良い……！」
育代は腰を震わせながら
甘んじて笠原のペニスと指を受け入れている。
「こりゃチンポもすぐ入りそうだな。
っと、その前に一発種付けしとくか！
中に出すぞ！」
「中はだめぇ……！　妊娠しちゃう……」
「博司君が育代ちゃんを妊娠させても良いってさ！」
「そうなのぉ……？　博司さん……？」
愛しの妻を妊娠させて良い訳がない。
しかし今日もアフターピルは貰えるらしいし
育代も朝には何も覚えていないはずだ。

「……うん。 妊娠させてもらいなよ……」
高鳴る胸を押さえながら僕は震え声で言った。
育代は困ったような表情を浮かべたが
笠原がペニスを突くと
すぐに快楽で顔を歪ませた。
「出すぞ！ 俺の子を孕めよ！ 育代ちゃん！」
笠原が一際強く育代の中にペニスを押し付けた。
パパ

「あう！　あっ、あっ……！
中で出されてる……！
妊娠しちゃう……！」
育代の膣内で笠原が射精した。
笠原は育代を妊娠させるつもりで、
育代は笠原の子を妊娠するつもりの
子作りセックスだ。
頭がクラクラする。

「あぁ……　笠原さんの赤ちゃんできちゃう……」
育代の膣口から濃い精液が零(こぼ)れ落ちた。
今日も僕の妻は子宮まで犯されてしまった。
浴衣の下でペニスが熱く濡れている。
どうやら射精してしまったらしい。

まだ一人だけ射精していない相沢が腰を上げた。
「それじゃ俺は奥さんのアナルバージンを貰おうかな」
「あっ、ズルいぞ、お前」
「順番だろ？」
相沢は育代とアナルセックスをするつもりようだ。
ペニスがあんな小さい穴に入るのかと
冷めた頭で考える。
この男は三人の中で一番まともそうなので
無茶はしないでくれるだろうと高を括った。

「いたぁっ！」
育代のアナルに相沢は中々挿入出来ずにいたが
亀頭まで入ると陰茎の根本まで一気に入った。
妻は苦しみ悶えている。
あんなに太いペニスが入って痛くないはずがない。
ズッ

「育代さんの初アナル頂いちゃいました。
博司君、見えます？」
相沢が育代のアナルにペニスを
挿入している所を見せ付ける。
小さな穴が広がって
陰茎をズッポリ咥え込んでいた。
僕と育代はお尻でセックスなんて
した事はない。
育代にも当然経験はないはずだ。
相沢が妻のアナル初経験の男なのだ。
妻のアナルバージンを
奪われた喪失感を感じながら
僕のペニスは再び熱を持ち始めた。

「すっごいキッキッ！
奥さん、どう？
初めてのアナルセックスは？」
「痛い……！　裂けそう……！」
「その内、気持ち良くなるよ。
そうそう良い物を用意してたんだった」
相沢が傍らのビニール袋から
棒状のマッサージ機らしき物と
ケバケバしいパッケージの箱、
それと先程笠原に渡していた物と
同じ筒を取り出した。
箱と筒を僕に寄越す。

「オナホとローションです。使った事あります?」
「いや……ないです」
「オナホールですよ。オナニーに使うんです。ローションは潤滑液ね」
「は、はぁ……」
「奥さん使わせて貰うお礼にあげますよ」
「あ、ありがとうございます……」
妻の体の対価がオナニーグッズとは少々洒落が利きすぎている。
昨日知り合ったばかりの男たちは妻の口を犯し、膣を犯し、尻を犯した。
対して僕は妻が犯される姿を見ながら妻に触れる事も出来ずに
オナニーするしかないのだ。
箱の中にはピンク色の柔らかい物体が入っていた。
筒になっていて入口は女性器を模して作られている。

「奥さんにはこれね」
相沢はマッサージ機のスイッチを入れた。
先端がブルブル震えて機械音が部屋に響いた。

「あああああ！　何？　なに？　なにい？」
振動するマッサージ機の先端が
クリトリスに触れる。
激しい刺激によって育代の低い苦悶が
高い嬌声に早変わりした。

「こんなのっ！　こんなのしてると……！
おかしくなっちゃう……！」
「お尻の痛み、気にならないでしょ」
「そうだけど！
でもっ！　だめっ！　だめぇ！」
「何が駄目なの？」
「熱くて……！　痺れて……！
ああぁ！　わかんないッ！」
アナルに挿入されたペニスの痛みなど
そっちのけで育代は
クリトリスへの快楽で身を悶えている。
息を荒くして腰をビクビク震わせていた。

パン!
パン!
「ハハハ！ イッちゃうんですか、奥さん？
初めてのアナルセックスで
イッちゃうなんて変態ですね！」
クリトリスにマッサージ機を当てたまま
相沢が育代のアナルを激しく突く。
育代のアナルに相沢の陰茎が
出たり入ったりする所がよく見えた。
暴言を吐かれ、乱暴に尻の穴を
犯されているというのに
妻はトロけた目で虚空を見つめ
快楽に打ちひしがれている。

パン!
パン!
我慢出来ずに僕はオナホールを取ると
入口にローションを塗りたくり
ペニスを挿入した。
人目を気にする体裁など
とうに瓦解している。
ヌルヌルした液体に包まれて
柔らかい感触が亀頭から陰茎に伝わった。
オナホールは手でするよりも
気持ちが良く、
犯される妻の淫らな姿を
見ながらオナホールで
行うオナニーは最高だった。

「見てください、奥さん！
奥さんがアナルセックスしてるとこを
見て旦那さんがオナニーしてますよ！」
「いやぁ……！
見ないでぇ……！　あぁう！」
「イッちゃうとこも見せてあげましょうよ！」
「はぁ……！　あうぅ……！
やぁ……！　あっ、あっ、あっ！」

「〜〜ッ！！　あっ……！〜〜ッ！」
育代は息を止めると腰を大きく震わせた。
足はガクガク震え、
全身がビクビク痙攣している。
アナルに相沢のペニスを挿入しながら
オーガズムを感じている
育代の肢体は淫らだった。
オナホールを出し入れする速さが
自然と上がる。

「奥さんがイく所を見て
博司君興奮してるみたいですよ」
「はぁ、はぁ……　やぁ……　恥ずかしい……」
「もうすっかり馴染んだみたいですねぇ～。
お尻の穴にチンポが
入ってる感覚はどうですか？」
「変な感じ……　お尻じゃないみたい……
なんかエッチな気分……」
「そりゃ、そうですよ。
普通の人はお尻で
セックスなんてしませんから。
奥さんがエロいんです」
「ひど～い、相沢さんがお尻に入れたのにぃ」
疲弊の色を見せつつ
苦笑混じりに育代が微笑む。
話している間も相沢の陰茎は
育代のアナルに出たり入ったりしていた。
夫の前でアナルセックスしながら
談笑する妻の姿は背徳的だった。

「俺もそろそろイキますよ。お尻の中に精液いっぱい出してあげますからね」
「えへへ……ちょっと怖い……」
「初めてのアナル中出しですからね。初アナルも貰っちゃったし博司君に悪いなぁ」
「博司さんはお尻でエッチなんてしません～」
「こんなに気持ち良いんだからもったいないよ。
博司君も奥さんのアナルでヤりたいよね？」
日常会話をするように相沢は育代のアナルにペニスを挿入したまま話し掛けてくる。
平常心など保ってはいられない。
オナニーする手を休めず妻に言う。
「僕も育代のお尻でセックスしたいな。
相沢さんのお古になっちゃったけどね」
「え～、そんな事言わないでよぉ。
嫌だったら……あぅん！」
育代の言葉を
遮るように相沢が尻を突いた。

「も～、今博司さんと話してるとこ…… あん！」
「ごめん、ごめん。 奥さんのお尻が気持ち良いからつい。 構わず続けて」
「こんなんじゃお話出来ないじゃない…… 博司さん後で…… あう！」
わさと会話を止める相沢に育代は頬を膨らませて抗議した。
「後でお尻でセックスしようね」
満面の笑みで妻は僕とアナルセックスする事を約束する。
しかし他の男とアナルセックスしている状況がその笑顔を歪に見せた。
パン

パン
パン
「はぁ！　あん、あん！　あっ！」
相沢のピストン運動が早くなった。
もう射精が近いのかもしれない。
陰茎を抜いては育代の腰を
引き寄せてアナルの奥まで滑らせている。

「あっ！　あっ！　あぅ……！」
相沢の腰がビクビク動く。
その動きに合わせて育代は
あえぎ声を漏らした。
ビュ
ビュッビュッ

「はぁ……　はぁ……　はぁ……」
お尻の穴の力が強いのか、
硬度を失ったペニスはすぐさま
チュポンと外へ弾き出された。
育代のアナルから精液が溢れ出る。
今まで精液の味を知らなかった
直腸に射精されたのだ。
妻の小さなアナルから垂れ流れている
精液を見ながら僕は射精した。
「育代ちゃん、次俺ね」
足腰が立たなくなっている育代に
笠原が勃起したペニスを
ブラブラ揺らして近づいて来た。

笠原は相沢と入れ替わる形で育代を背後から抱き上げた。
幼児にオシッコをさせるようなポーズのせいでアソコもアナルも丸見えだ。
もっとも、アナルの方はペニスが挿入されているせいでハッキリとは見えないが。
「あうぅ！　またお尻ぃ……？」
酒とローション、そして精液にまみれた育代のアナルは
笠原の太いペニスを容易く受け入れた。
妻の体内にペニスが挿入される瞬間はやはりそそる物がある。
再び下腹部は燃えてペニスを硬くさせた。
ズプ

「あれぇ、育代ちゃん。もしかしておマンコに入れて欲しかった？」
「だってお尻すこし痛いから……」
「その割りには気持ち良さそうじゃない。とても今日初めてヤったとは思えないよ」
笠原が育代の太腿を両腕で抱えて上下させた。
持ち上げられて育代の体が浮くとペニスがアナルからひり出され、
腕の力を緩められると育代は自らの重さでアナルにペニスが挿入されていく。
両腕で育代の体重を支えるのは大変そうだが良い筋トレになりそうだ。
妻の体を使って笠原が筋トレに励んでいるように見えて可笑しかった。
カリ首から陰茎の根本まで
何度も出し入れされ、深く挿入される度に
育代はあえぎ声を弾ませた。
痛がる所か嬉しそうですらある。
パン
パン

「エロい声出すようになったなぁ。そんなにお尻でするの気に入った？」
「はぁ、はぁ……！　そういうんじゃなくてぇ……！
乱暴に……　物みたいに扱われるのが気持ち良いの……！」
「ハハハ！　育代ちゃん、どMだなぁ！」
酔って正気を失っているとは言え、今の言葉は妻の本心ではないのか。
玩具みたいに犯されたいと育代は常日頃から思っていたのか。
混乱と疑念が渦巻く中、育代は僕の方を見て薄く笑った。
パン　パン

「博司さん優し過ぎるんだもの……　ちょっと物足りない」
男たちが笑い、育代も小さく笑う。
妻の告白に僕は動揺を隠せずにいた。
心臓の鼓動が激しく高鳴り、肩が震えた。
侮辱され蔑(さげす)まれ、男たちには嫉妬を、妻には怒りを燃やす。
しかしその憎悪にすら今の僕は快感を見出していた。
暗く沈んだ心の中に衝撃的で快楽的な爽快感が突き抜ける。
不思議な感覚だった。
スローモーションのように
妻と男の情事がゆっくり見える。
全身の肉を揺らし、乳房をたゆませ、
アナルでペニスを咥え込む妻の姿を見るだけで
熱くて甘い快感が脳を焼いた。
アナルの奥までペニスを挿し込まれる度に
あえぐ妻の声が聞こえるだけで脳が白く痺れた。
オーガズムに達したような快感が
絶えず脳を撫で続けた。

「三好い！　お前、マンコに入れてやれよ」
「やる、やる！　育代ちゃんとセックス」
「はぁ、はぁ……　両方いっぺんにするのぉ……？」
最早育代は僕の物ではなくなっていた。
僕の妻は男たちのオナホールと化していた。
育代とセックスするのに僕の許可も必要なければ育代の意思も関係ないのだ。
当然の顔をして
三好が股を広げている育代に歩み寄る。
勃起したペニスを膣口に当てる三好だったが
中々挿入には至らない。
何しろ笠原の巨根が直腸に収まっているせいで
膣が圧迫されているから
入り込む余地がないのだ。
何度も試みて、ようやく育代の膣に
三好のペニスが挿入された。

「あうっ……！　あぁ……！　ああ……ッ！」
「あー……！　すっげぇキツキツ！」
「うぉっ、ただでさえキツいアナルがさらにキツくなったな。
チンポ千切れそう。どお、育代ちゃん。二本挿しの感想は？」
「ハッ！　ハッ！　ハッ！　お腹の中いっぱいで苦しい……！
でも、イタ気持ち良いい……！」
膣とアナルを犯され、育代の下腹部は二本のペニスが入った分だけ膨らんだ。
苦痛に顔を歪ませる育代だが声色は淫らそのものだった。
「はぅ……ッ！」
「ちゃんと持てよ。ちょっとキツくなってきた」
「あぁ。育代ちゃんのサンドイッチだね」
三好の言う通り、
独身男と人妻のサンドイッチだ。
おしくらまんじゅうのように
身を寄せ合い、育代の膣とアナルで
繋がって三人は一体となっていた。

「アナルとマンコ、どっちが気持ち良い？」
「わかんない……！　わかんなぁい……ッ！」
膣に、アナルに、男ふたりが競って育代に腰を叩きつける。
前後を激しく打ち付けられ、抱えられている育代はなすすべもなく揺さぶられた。
身動き出来ない体勢で乱暴にセックスさせられる姿はまさしくオナホールである。
そんな扱いを受けているというのに育代はどこか嬉しそうだった。
パン
パン

「どっちも気持ち良い！　おマンコもお尻も気持ち良い……！」
だらしなく顔を歪めて育代が淫らにあえぐ。
気を良くした男たちは勢いを弱めることなく何度も育代の下腹部を突いた。
パン
パン

「そろそろイクぞ！　ケツの中に出すぞ！」
「俺もイク！　育代ちゃんの中に出すよ！」
「出して……！　ふたりともお腹の中にいっぱい出して……！」
パン
パン

「はぁ……！　すごい……！　お腹の中いっぱい……」
恍惚の笑みを浮かべる育代の膣内と直腸に男たちは射精した。
情事の結晶が妻の股から滴り落ちる。
どぴゅる
どぴゅる

「いやー、良かったよ、博司君。ほらこんなに出しちゃった」
笠原がニヤニヤ笑いながら育代の股間を見せ付けてきた。
膣とアナルがヒクヒク動いて男たちの精液が零れる。
僕もいつの間にか射精してしまったようだ。
下腹部が熱くて白い粥のような精液で濡れていた。
は―……
は―……
「一旦風呂行こうぜ。
綺麗にしてまたヤろうや」
笠原が降ろすと育代は尻もちをついた。
もう足腰が立たないらしい。
虚ろな目で快楽の余韻に浸っている育代は
笠原と三好に肩を担がれて温泉へ連れられた。

体を洗い終えた後、育代は何のためらいもなく
相沢の上に腰を下ろして
勃起していたペニスを自ら咥え込んだ。
アナルが見えるのも構わず育代は
僕たちの前で一心不乱に尻を上下させている。
相沢はマッサージを受けているかのように
リラックスして育代の体を受け止めた。
笠原と三好も温泉で初めて会った時とは違い、
余裕を持って育代の裸を眺めている。
奇妙な世界に迷い込んだようだ。
ズッ
ズッ

肌を見せるだけで身をくねらせて恥らいを見せた妻は
すっかり変貌を遂げていた。
つい先ほどふたりで温泉に入った時は
愛の言葉を交わし合ったというのに
同じ場所で育代は他の男とセックスしている。

育代は今、何を考えているのだろうか。
何も考えられないくらいまだ酔っているのか。
冷たい外気と熱い湯の温度差で
僕はすっかりアルコールが抜けていた。
完全に酔いが覚める事はないにしても
少しくらいは平常心を取り戻していてもおかしくない。

妻は演技をしているのかもしれなかった。
その証拠に体を洗った後の歩き方は
ゆっくりだがしっかりしていたし、髪も器用に結っていた。
いつもと大きく違う点は淫猥に男の体を貪る事くらいだ。
「本当はもう酔ってないんだろ」と聞いてみたかった。
しかし、もし肯定されたら
夫婦の関係が壊れてしまいそうで
怖くて尋ねる事は出来なかった。

「良い湯ですね」
「そうですね……」
相沢は僕の妻とセックスしながら
何食わぬ顔で僕に話し掛ける。
ごくありふれた会話である。
日常的な会話が、
彼にまたがって腰を振っている
妻の非日常な行為を際立てた。
ズプ
ズプ

「博司君と奥さんのおかげで良い思い出になりましたよ。
そうだ、記念に写真撮りません？」
「写真ですか」
「ええ、ここで。　これ使ってください」
そう言うと相沢は防水ケースに包まれた
スマホを操作してカメラを起動すると僕に寄越した。
「折角だから中出しする所を撮りましょうか。
ちょっと待っててください」

「あうっ！　あっ！」
尻を鷲掴みにされて腰を叩きつけられると
育代は声を弾ませた。
オナホを扱うように相沢が育代の膣を使って
ペニスをしごいている。
それに対して育代はあきらかに喜んでいる様子だった。
淫らにあえぎ、相沢の動きに合わせて腰を振っている。
パン！
パン！

「射精したばかりだし
キツいアナルの後だからもう少し掛かりそうですね。
こうしてるのも悪くないけど」
ハハと笑い相沢は何度も育代の膣にペニスを擦り付ける。
浴場に肉と肉がぶつかり合う卑猥な音が木霊した。

「ほら、奥さんも頑張ってくださいよ」
「はぁ、はぁ！　もうだめぇ……！」
威勢よく腰を振っていた育代だったが
もう限界を迎えたようだ。
膝が震えて思うように動けないでいる。
アナルがヒクヒクと痙攣（けいれん）していた。

「もうちょっとでイキそうだから頑張ってください」
「はぁ、はぁ！　はい……！」
育代は相沢に強くしがみついて震える足で体を揺らした。
相沢の精液を膣内で射精させるために
僕の妻は懸命に腰を振っているのだ。
パ!!
パ!!

はー……
はぁ……
「そろそろ良いかな。それじゃ向きを変えましょう」
写真のポーズを取るために相沢は笠原と三好を呼んだ。

「そうそう。良いよ、奥さん」
「えへへ……」
育代は相沢たちに言われるままポーズを取った。
両手をピースして足を開き、
三人の男に体を任せている。
笠原と三好は片方ずつ乳房を揉み、足を支えた。
相沢はペニスの挿入がよく見えるよう
膣口のヒダを広げた。
卑猥なポーズだった。

「奥さん、笑って、笑って」
「は、はい……」
ニッコリと育代が微笑む。
男たちに抱かれて笑う妻は
現実感を失わせるほど淫靡な魅力に溢れていた。
震える指で相沢のスマホを操作する。
「動画で撮りましょうよ。
後で博司君の方にも送りますから」
「ええ……」
妻の痴態を相沢のスマホで
撮影する事に抵抗など感じなかった。
今の僕は常識というタガが
外れてしまっていて
善悪の判断も付かない。
ただ、卑猥で美しい
妻の姿を記録として残したいと思った。
ビデオのアイコンをタッチすると
同時に「ピッ」という音を発して
録画が開始した。

「博司君、撮れてる～？
奥さんの生マンコ超気持ち良いよ～。
奥さんはどう？ 俺のチンポ気持ち良い？」
「はい……　気持ち良いです……」
「博司君のチンポとどっちが気持ち良い？」
「相沢さんのおチンチンの方が気持ち良いです……
おっきくって硬くって……
気持ち良い所をいっぱい触ってくれます」
「おいおい、俺のチンポは～？」
「笠原さんのおチンチンも
三好さんのおチンチンも気持ち良いです……
お尻に笠原さんのおっきいおチンチンが入った時は
死ぬかと思っちゃった」
「俺も育代ちゃんのアナルでヤりたい～」
「じゃあ、後で……」
「アナルも良いけどやっぱマンコだわ。
妊娠するかもしれないってのはロマンがあるよね。
しかも奥さん、危険日なんでしょ？」
「は、はい……　妊娠しちゃうかも……」
「こいつは何人も妊娠させてるから
俺の子供産んでよ、育代ちゃん。
また後で中出ししてあげるからさ」
「そんなの分かんないですよ……
いっぱいエッチすれば
出来るかもしれませんけど……」
「はいはい。出るよ～。
赤ちゃんの元、奥さんの子宮に出すよ～」

「あっ、あっ……！
精子が奥の方に……！
妊娠しちゃう……！」
「気持ち良さそうだね～。
中出しされるの好き？」
「好きぃ……
お腹の中に入ってくる感覚好きぃ……！」
「マンコにもアナルにも
たくさんチンポ突っ込んであげるよ。
朝には精液で奥さんの腹パンパンだよ」
「はぃ……　いっぱい……　セックスして……」
ドピュッ

再生を止める。
この動画を見たのは何度目だろうか。

育代は妊娠した。
あれから数ヶ月経つ。
旅行以来、避妊をしていたので
あの日に妊娠したのは間違いない。
アフターピルなんて嘘だった。
育代の妊娠が発覚した当初は苦悩した。
相沢たちに連絡しようとしたが
電話が繋がらなければ
名刺の会社も架空の物だった。
妻を妊娠させた事はこの際どうでも良い。
妊娠するかもしれないと分かっていれば、
さらなる興奮を得ていただろうと
思うと悔しいのだ。

何故騙した。
何故黙っていた。
彼らの言い分は想像つくが
可能な事ならばあの時打ち明けて欲しかった。
当時の比類ない甘美な快楽を
反芻する度に悔やまれた。
あの時、妻が妊娠させられるかもしれないと
分かっていたならば、
快楽もより強い刺激になっていたことだろう。

あの時の興奮と後悔を育代に叩きつける。
思えば思うほど、亀頭から伝わる快楽は熱を増した。
「博司さん……！　あんまり激しいと赤ちゃんが……！」
誰との赤ん坊だと心の中で毒づきながら奥深くを突く。
父親が僕である可能性も否定できないが
十中八九あの男たちの誰かだろう。
「激しいのが好きなんだろ？」
怒りのまま、快楽のまま育代に腰を叩きつける。
育代は苦しそう声を上げるが
あえぎの中に快楽の艶が見えた。
この女は乱暴に扱われるのが好きなんだ。
パン
パン

育代はあの日の事を
何も覚えていないように振舞っているが、
遠慮がちに妊娠を報告した様子から察して
酩酊状態の記憶の欠落は嘘だと思っている。
酔った振りをして
男たちとのセックスに溺れたのだ。
貞淑な妻を装って
なんて猥(みだ)りがましい女なのだろう。
ぱん
ぱん

しかし僕に妻の嘘を暴く資格はなかった。
そもそもの発端は僕にある。
育代が男たちとセックスしたのは
僕の願望通りなんだ。
分かっている。
分かっているが、
あの時の妻の淫らな姿が脳裏から離れない。
あの貌をもう一度見たい。
僕は電マを取り出した。

「あぁ～～ッッ！」
クリトリスを激しく刺激され
部屋に育代のあえぎ声が響く。
大きな声を出して思いっ切りセックスするために
ホテルを使用しているから
みゆきに遠慮する必要もない。
「だめ！ だめ！ だめ！ も、もうやめ……！」
執拗にクリトリスを攻められて育代は音を上げる。
しかしこの程度では終わらせない。
ビク ビク

「あぁーーっ！　あうっ！　あぅ……！」
クリトリスをいじめつつ
膣の奥までペニスを挿入する。
ふたつの性感帯を同時に攻められ
育代はよがり狂った。
勃起促進剤によって持続力を得た。
電マやローションなどの小道具によって
テクニックをカバーする手段を得た。
実際、以前とは比べものにならないくらい
最近のセックスは充実している。
ゾクゾク
ズズ

でも何かが足りないのだ。
決定的な快楽の決め手になる要素が欠けている。
それが何かは嫌というほど理解していた。
相沢たちと連絡が取れれば
また彼らに頼むのだが仕方がない。
私生活まで脅かされない安全な相手……
都合の良い相手……
そんな男を探して妻を抱かせたい。
ア

また、あの時の快楽を味わいたい。
頭が白くなって脳が快楽の湯に浸かるような
至福の体験を再び味わいたい。
それもこれも育代が最愛の妻だからだと思う。
愛しいからこそ劣情が掻き立てられるのだ。
犯されて妊娠させられる育代を想像して
射精感が限界まで高まった。

「出すぞ！　育代ッ！」
「ふぐっ！　ひぐっ！」
頭から腰に掛けて電流が走る。
肉付きの良い太ももを抱き締め、
育代の奥深くで誰の子だか分からない
赤ん坊に向けて射精した。
ビクビク

「はぁー……！　はぁー……！」
ぐったりしている育代の足を愛おしげに撫でた。
「愛してるよ……　育代……」
「私も愛してます……　博司さん……」
END